

# ～くぬぎの森～

第 24 号

2013年2月1日

熊本高等専門学校熊本キャンパス  
図 書 館



(さくら)

## 目 次

### 〈随 想〉

図書館改修から1年.....	図書館長	三 好 正 純	2
天草を世界史の中に位置付ける読書案内.....	人間情報システム工学科	村 上 純	7
図書館のバイトを通して.....	情報通信工学科4年	堀 田 果 梨	16
図書館アルバイトを通して.....	情報通信工学科4年	山 隈 みゆき	17
図書館勤務を通して.....	電子工学科4年	山 田 理 園	17
学生図書職員を通して.....	電子制御工学科4年	田 上 朋 和	18
1年を振り返って.....	情報工学科4年	郡 司 美 玖	18
学生図書職員を振り返って.....	情報工学科4年	高 山 夏 実	18

〈第34回校内読書感想文コンクール選考結果及び作品紹介〉.....	20
-----------------------------------	----

〈第58回青少年読書感想文全国コンクール熊本県審査入賞者及び第32回全国高校生読書体験記コンクール入賞者〉.....	35
--	----

### 〈図書館からのお知らせ〉

図書館利用案内.....	36
お知らせ.....	36
図書館利用状況報告・蔵書数及び視聴覚資料.....	37
編集後記.....	図書館運営委員 大 石 信 弘 38



# 随 想

## 図書館改修から1年

図書館長

三好正純

現在の図書館に改修されてやがて1年になります。ここでは図書館の改修について振り返ってみます。改修前の図書館は老朽化が激しく、閲覧室は壁のあちこちに雨漏りのシミや塗装の剥げ落ちが目立ちました。また、3階の書庫には大雨になると決まって雨漏りをする所があり、そのたびに職員がバケツを持って駆けつけるという情けない有様でした。もちろん雨漏りによる湿気は書籍には大敵です。そのような折、図書館棟（現ICT活用学習支援センター、以下ICTセンター）が耐震改修されることになり、あわせて図書館内部もリニューアルされることになりました。リニューアルといっても改修の目的が耐震補強ですから大きな柱や力壁など基本的な構造はそのままでした。そのため、設計には大きな制約がありました。また、図書館にはICTセンターの窓口という役割があって運用面の制約も加わりました。しかし、本校の管理課職員はじめ関係教職員および設計事務所の方々のご協力により最大限のリニューアルができました。改めて感謝申し上げます。さて、ここからは図書館の改修における拘りの一部を紹介します。

### 1. 書架の免震化と通路の拡幅

地震対策の一つとして、閲覧室にある背の高い書架（7段書架）は免震書架になっています。本館には8本の7段書架が並んでいます。利用者は本を探すとき書架間の通路に立ち止まることがよくあります。そのとき地震が起きて書籍が一斉に飛び出すと書架に挟まれた人は逃げ場がなく書籍に埋まり危険です。実際に震災で人身事故が起きています。人身事故はなくても、飛び出した数多くの書籍を元どおり棚に戻す作業はたいへんな手間です。このようなことから本館では免震書架を導入しました。免震書架は地震などの大きな揺れがあったとき、書架の底

面にあるストッパーが解除され書架自体が滑り動く構造になっています。これにより書架の振動を軽減し収納されている書籍の飛び出しを防ぎます。ただし、免震の仕掛けが書架の底部にあるため、全体に書棚の位置が高くなり、最上段の書籍が取りにくくなってしまいました。これには申し訳ありませんが、館内に踏み台を置いていますので、取りにくい方はご利用ください。

免震書架の導入とともに書架間の通路幅が広がりました。改修前の通路幅は80cm 足らずで車椅子はやっと通られる程度でした。また、通路で書籍を探している人と、その横を通り抜けようとする人との間にもお互いに気配りを要しました。そこで、閲覧室の書架配置を90° 変えることで通路幅を90cm 以上確保でき通りやすくなりました。

### 2. 静かな環境とグループ学習室

図書館ではゆっくりと自分の時間を過ごしたいものです。しかし時には仲間と参考書を囲み話し合いながらの勉強もしたいものです。この双方の利用者に応える配慮がなされています。改修前の図書館には個人机もありましたが、4人掛けの平机が多くありました。大きな平机はグループでの利用にはたいへん便利ですが、個人でゆったりと思考にふけるのには不向きです。この平机と個人机が同じ閲覧室に置かれていたため、グループで利用している学生たちの話し声が、個人で勉強している学生にとってはとても気になっていたようです。そこで、閲覧室の机をすべて個人机とし、グループでの利用者にはグループ学習室を2室設けました。個人机には隣席との間に視線を遮る仕切り板があり、個人で集中したい人が利用します。一方、グループ学習室には6人掛けの平机が1台あり、主にグループで利用します。館内に設置しているため本の貸出し手続きは不要です。図書館の本を自由に利用しながら仲間との勉強や話し合いができます。グループ学習室は天井まで仕切られた個室です。議論で多少大きな声になっても室外の利用者の迷惑になりません。そのため気楽で人気も高いようです。なお、グループ学習室を利

用するときは登録が必要です。登録は予約もできませんが、原則として2時間単位です。ただし、空いているときはいつでも利用できます。

さらに、静かな環境づくりとして歩行者の足音をできるだけ抑えられるよう、閲覧室の床はカーペット張りにしてあります。以前は机の横を通る人の足音が気になるという声をよく聞きましたが、解消されました。なお、カーペットは拭き掃除ができませんので、土や泥汚れのある履物での入館をお断りしています。図書館入口にスリッパを用意していますので、必要に応じて履き替えて入館ください。

### 3. 無線LAN

図書館を含むICTセンターのすべての場所で無線LANが利用できます。もちろんインターネットにも繋がります。近年は情報の取得にインターネットを利用することが多くなりました。本館では蔵書だけではなく、インターネットHPの閲覧も可能な環境を提供しています。閲覧室のすべての個人机に商用電源（AC100V）のコンセントがあり、入館者が持参するパソコンも使用できます。なお、パソコンの貸出は行っていませんが、図書検索性パソコンが閲覧室に2台設置されていて、ちょっとした情報検索には利用可能です。また、じっくりと情報検索をしたい人には同フロアにあるICT活用学習ルームのパソコンが最適です。このように、いつでもインターネットへ繋がる環境が整備されています。

### 4. 閉架書庫の集密化

閉架書庫が1階と3階にあり、論文誌や古書など資料的書籍が保管されています。主に研究で参考文献を探したり古書に触れたいときに利用されます。事務室から入庫しますが、係員に申し込めばいつでも可能です。現在、4万冊ほどが保管されており、論文や学術雑誌のほか開架書庫で時代遅れとなった書籍などが毎年増えていきます。そのため、狭い空間に将来にわたり多くの書籍の収納が見込まれることから1階の書庫には移動書架を設置し集密化が図られました。一度入庫してみませんか。タイムスリップを楽しめます。

### 5. オープンスペースの利用

本館入口前のオープンスペースに新聞を置きました。気軽に立ち寄って読んでもらえるとうれしいです。このオープンスペースは改修前には廊下のイメージでした。以前、ずいぶん広い廊下だな、と感

じていた人もいるでしょう。実は、いまのメディア制作スタジオ（旧AVルーム）の部屋は後から仕切られてできたもので、仕切られる前は全体がオープンスペースだったのです。したがって今回の改修で、少し狭くはなりましたが、オープンスペースに戻った感じです。テーブルとイスが置かれていますので、ちょっとしたミーティングや歓談の場所として利用してください。

### 6. AVルーム（ICT活用学習ルーム内AVコーナー）

2室のAVルームがICT活用学習ルーム内に設置されています。改修前のAVルームには個人観賞用の装置が4台とグループ観賞用の装置が1台ありました。記憶にある人には、改修後は個人観賞用がなくなったように感じられるでしょう。これには時流に対応した考えがありました。現代の映像コンテンツのほとんどがCD（コンパクトディスク）メディアで記録され、パソコンでも再生可能です。また、パソコンのディスプレイも以前に比べると大型化し個人の映画鑑賞にも十分な大きさになってきました。そこで今回の改修では、個人観賞用はICT活用学習ルームのパソコンを使用することを基本としています。音声については周りの人の迷惑にならないようイヤホンを使用してもらいます。なお、イヤホンは各自が持っているものを利用しますが、ない人はICTセンターの窓口で借りることもできます。したがって、AVルームは基本的にはグループ観賞用になりますが、個人観賞でもVHSなどCD以外のメディアの再生や大画面とスピーカで楽しみたい人も利用できます。なお、2室しかないのでグループ・個人に関わらず予約が必要です。また、映画やドキュメンタリーなどいくつかの映像コンテンツは図書館にあります。観たいコンテンツがありましたら図書館で借りてICT活用学習ルームで観賞してください。

### 7. 雑誌コーナー

入館し先ず目に入るのが新着図書と雑誌のコーナーでしょう。新着図書のコーナーにはブックハンティングや学生の声で要望があった図書が置かれています。どんな本が置かれているかは図書館入口の掲示板に各本の帯や記事で紹介されています。雑誌コーナーには趣味の雑誌を基本に置いています。以前は趣味の雑誌と学会誌などの学術雑誌とを一緒に

置いていましたが、学術雑誌は静かな環境でゆっくり閲覧できるように閲覧室の奥（グループ学習室前）にコーナーを移してあります。

以上、改修について紹介しましたが、最後に利用者のアンケート結果を紹介します。アンケートは入館者に自由に回答してもらいました。質問項目はつぎのとおりです。

- I. 図書館内の机・イスの配置や数について、どう思いますか？
- II. ①グループ学習室、②ICT活用学習ルーム、③AVルームについて、使いやすさは？
- III. ①本の種類、②雑誌の種類について、どう思いますか？
- IV. その他の意見

回答は31名から得られ、結果は表1のとおりです。

表1 改修後の図書館に関するアンケート結果

回答 (%)	I	II			III	
		①	②	③	①	②
満足	76.7	58.1	58.1	22.6	61.3	66.7
どちらでもない	16.7	29.0	35.5	61.3	25.8	30.0
不満	6.7	12.9	6.5	16.1	12.9	3.3

また、不満の理由を自由記述で尋ねた回答には、つぎの意見がありました。

- ・机やイスについては；「仕切りのない机がもっとあると勉強を教えるとき助かる」。
- ・グループ学習室については；「予約などシステムがわからない」「声が響く」「一緒に勉強してくれる友人がいない」「丸見えで使うのに勇気がいる」。
- ・学習ルームについては；「意味がわからない」「丸見えで使うのに勇気がいる」。
- ・AVルームについては；「認知度が低い」「予約などシステムがわからない」「手続きが煩わしい」「視聴しているDVDがみえるのがいや」「丸見えで使うのに勇気がいる」「使い方の説明があいまい」。
- ・本の種類については；「専門書以外の本を増やしてほしい」「マンガも置いてほしい」「釣りの本がほしい」。
- ・雑誌については；「読みたい本がない」。
- ・その他の意見として；「空気が悪い」「たまに暑

い」「グループで勉強できる所がもう少しあったらテスト期間等に利用しやすい」「今まで借りた本の記録が残っていると卒業時に1年から5年までの借りた本の履歴が見られてよいと思う」「借りられる本の数を増やしてほしい」「静かなのはよいが、昔みたいに大きな机がもう少しあると教え合いやすい」。

以上がアンケート結果です。ご協力いただいたみなさま、ありがとうございました。

さて、これらの結果をまとめると、満足度は「どちらでもない」を含めて概ね良好のようです。しかし、意見として「システムが分からない」「認知度が低い」「使い方の説明があいまい」など図書館からの周知不足もあるようです。また、試験期間中のお互いに教え合う場としての利用を想定した意見もありますが、グループ学習室が使用できないときはオープンスペースや1号棟2階の多目的室を利用してください。また、部屋の使用で周りから見られることに対する意見がありますが、グループ学習室はもともと仕切りがなかったところを声が遮断されるようにガラス張りにしただけですし、AVルームについても以前から見えるようになっていました。近年は教員室や実験室なども含めて防犯上、部屋の見通しをよくするという考え方が基本のようです。次に、本や雑誌について趣味や娯楽本の要望があります。本館は学校図書館と大学図書館の両方を兼ねた図書館です。そのため基本的に教育・研究に必要な図書が中心になります。しかし、魅力ある図書館にするには専門書だけではなくベストセラー本や広く教養を身につける本も必要です。若い感性の学生諸君にブックハンティングなどで本を選定してもらえるとありがたいです。最後に、その他の意見として、借りた本の履歴を残すという提案があります。現有のコンピュータシステムで可能かどうかは不明ですが、今後このようなサービスも考えたいと思います。

図書館が改修されて1年が経過し、改修で変わったところや考え方が十分に周知されていなかったように思います。今回は利用者からのアンケート結果を含めて、その一部を紹介しました。今後も益々魅力ある図書館にしたいと考えています。これからもご意見をいただき、ご協力をお願いします。



図書館カウンター（兼 ICT センター窓口）



雑誌コーナー付近



7段書架の通路



書架の免震機構



閲覧室内の個人机



グループ学習室



図書検索用パソコン



閉架書庫 1階の集密書架



図書館入口前のオープンスペース



ICT活用学習ルーム



ICT活用学習ルームのパソコン群



AVルーム2室



図書館所蔵のDVDライブラリ



学術雑誌コーナー



## 天草を世界史の中に位置付ける 読書案内

人間情報システム工学科  
村上 純

### I

本誌『くぬぎの森』第二十号（二〇〇九年）の「海外に出た日本人について知ろう」の中で、ブラジルを始めどの国への移民にも多い熊本県出身者たち、中でも「からゆきさん」と呼ばれる天草・島原出身の女性たちの足跡を調べた。同第二十二号（二〇一一年）の「読書について」では岡村昭彦を取り上げ、彼の「ものすごい読書量」と、「歴史の結び目を探し、世界史のしっぽをつかまえる」ことに触発されたと述べた。

その後、岡村の本は二冊、『報道写真家・岡村昭彦－戦場からホスピスへの道』（松澤和正、NOVA出版）と『將軍と呼ばれた男－戦争報道写真家・岡村昭彦の生涯』（玉木明、洋泉社）を読んだ。松澤氏は、手段と目的を明確に意識した、時として不用意で滑稽なほどのストレートな岡村の行動は、一見ローカルに見える事実を、築いた本の山と世界中を飛び回る取材から、時間と空間に大きく広がる世界認識の中へ位置付けようとしたもので、彼のまなざしは、常に人間そのものへ回帰していたと書いている。ベトナムからホスピスへと続いた、ヒューマンなまなざしと、ユニークな足取りに松澤氏は強く惹かれ、岡村が家族と移り住んだアイルランドの家を訪ねた。それが松澤氏の本の出だしである。

玉木氏は、岡村という人物は、途方もない、ただならぬ、特筆されるべき人物であるのに、正当に理解されることなく、いまだに評価が定まらないまま忘れられようとしているとして、傑出した人物の生涯を思い巡らしてもらうために後者を執筆した。

私の書いた「海外に出た日本人について知ろう」が引用されているのをウェブ上で見つけたのは、これらの本を読んでいた頃だったろうか。関西大学文化交渉学教育研究拠点が発行している『周縁の文化交渉学シリーズ八 天草諸島の歴史と現在』所収の「『考』に殉じた天草の『からゆきさん』」（佐藤トウイウェン）という論文である。ウェブ上の情報の発信力を改めて実感するとともに、この『くぬぎの森』からの依頼で、私の築いた濫読の小山を「時間

と空間の中へと位置付ける」ことができたように感じ、嬉しく思った。そこで、今回もまた積み上がってきた小山から、同様の「位置付け」ができるように、キーワードとして天草を取り上げてみることにした。

「世界史のしっぽをつかまえよう」との方向付けを行った私の濫読を昨年、本誌第二十三号で「江戸の国際関係への読書案内」にまとめた。そこでは、日本に進出してきた西洋を日本人はどのように受け止めたかについて考えてみた。私の読書は、それからオランダやイギリスの東インド会社、大航海時代のポルトガルとスペインへと進み、植民地支配からキリスト教へ、さらに初期キリスト教やマニ教、グノーシスに辿り着いている。

五木寛之氏はカトリック司教である森一弘氏との対談『神の発見』（平凡社）の冒頭で、古代から現代まで、日本人が外国から受けた二つの大きな衝撃として、まず古代の大陸文化、次いで明治に始まる西洋・欧米文化を挙げている。

「和魂洋才」というスローガンには、大きなごまかしがあるのではないか。洋才には本当は深いところで洋魂とでもよぶべき精神のありようがあって、それが才という技術やシステムを支えているはずである。（中略）その根にあたる洋魂とはなにか。それがキリスト教文化であることは、すでにだれもが知っていることだ。

しかし、日本人は和魂洋才として近代化を押し進め、敗戦後は無魂洋才という制約なき身軽さで抜け道を走り続け、今行き止まりに直面した、と氏は書く。魂は人々の心や社会にブレーキとして働くものであり、日本人は、フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸して布教を開始して以来、容易に洋魂を取り入れようとしなかった、とも。

対談者の森氏の発言は大変興味深いのが、韓国と比較して日本のクリスチャン人口が少ない理由として、明治に入ってきたパリ・ミッション系と呼ばれるフランスの司祭たちの宣教活動で教会が育っており、彼らの信仰が厳格な雰囲気を持っていたため、カトリック信者は厳しい、堅いという印象を与えたのに対して、韓国では信徒が司祭を呼んできて教会活動が始まったのと異なることを挙げている。韓国のキリスト教については、『韓国とキリスト教一いかに

して“国家的宗教”になりえたか』（浅見雅一、安廷苑、中公新書）が参考になる。

パリ・ミッション系の司祭というところで、以前読んだ『西海の天主堂路』（井手道雄、智書房）を思い出した。医師である著者が「気の赴くままに歩いた天主堂への道筋で、知り、感じ、帰宅して興味のままに先達の書を読み進むうちに記録したノートをまとめた」本で、出版に至らないうちに亡くなった著者の意志を引き継いだ夫人が整理、再構成して刊行されたものである。長崎、福岡、佐賀、熊本の天主堂が、巻末の一覧を見ると、七十二堂も取り上げられている。

この本によれば、幕末から明治にかけて、潜伏キリシタンの発見により、カトリックの再宣教を使命にパリ外国宣教会（パリ・ミッション）が最初に来日し、日本のカトリック教会の基礎を築いた。彼らが関わった、西海（長崎、平戸、五島列島）の教会は、私も是非一度訪ねてみたいと思っているが、今は『NHK 美の壺 長崎の教会』（NHK「美の壺」制作班、NHK 出版）などを見て慰めている。

同書第二章は、宇土から天草の大江天主堂と崎津天主堂を訪ねる旅である。著者は、「パリ外国宣教会の神父と大工鉄川与助により明治から大正、そして昭和初期に、建てられた木造や煉瓦造り、石造り、鉄筋コンクリート造りの古い天主堂には建築史上、以前から興味を持っていた」という。大江天主堂は、同会所属のフレデリック・ガルニエ神父と鉄川によって昭和七年に建てられた鉄筋コンクリート造りの教会である。与助は神父たちから西洋建築の工法や幾何学を学び、多くの天主堂を残した。私たちの近くにある熊本市内の手取教会もそうである。

大江の次に著者が訪ねた崎津天主堂も鉄川の施工で、設計はノルマンディー出身のオーグスチン・ハルブ（アルブ）神父である。ハルブ神父もガルニエ神父と同様、来日後は一度も帰国せず、赴任地で亡くなっている。

著者の家系は両親とも潜伏キリシタンの家系だったそうで、医師らしく理性的で几帳面な中にも、強い信仰心が感じられる良書であると思う。絶版から、新しい出版社で二〇〇九年に再出版されたことは、幸いであった。

『鉄川与助の教会建築—五島列島を訪ねて』（林一

馬ほか、LIXIL 出版）は装丁にも凝った美しい本である。それによると、カトリックに限ると、日本に千二十棟ほどある教会のうち、長崎県には百三十近くが集中しているそうである。一八七九年に五島列島の中通島に生まれた与助は、三十棟もの教会建築を手がけた。貪欲に学んだ西洋の建築技術を、在来の工法で実現するだけでなく、次々に新しい試みに挑戦しており、技術史的な興味も覚える。この本には、鉄川の孫で建築家の鉄川進氏の文章も収められている。

パリ外国宣教会から日本再布教のために最初に派遣されたのは、一八四四年、琉球にフランス艦隊の軍艦から強引に上陸したテオドール・オーギュスタン・フォルカード神父で、日本上陸を試みたが果たせなかった。彼の琉球での日記は、『幕末日仏交流記—フォルカード神父の琉球日記』（中島昭子、小川小百合訳、中公文庫）に邦訳されている。

## II

宇土市は二〇〇九年に「シリーズ再検証・小西行長」と題した講演会を開催し、さらに「小西行長を見直す」の題でシンポジウムを行なった。それらの講演内容をまとめて一昨年発行されたのが『再検証

小西行長—謎の武将が今よみがえる』（宇土市教育委員会）である。加藤清正や細川氏により痕跡が消し去られ、話題さえタブー化していた行長についての研究が、宇土市教育委員会の資料収集などにより、近年活発になってきている。

同書の冒頭に置かれた五野井隆史氏の基調講演では、十七世紀後半のイタリア製地図にある九州の中に、宇土と八代の地名が記載されていて、キリシタン大名の行長が宇土・益城・八代の領主となったことが、この地をヨーロッパに知らせることにつながったと述べられている。キリシタン史が専門の五野井氏には『キリシタンの文化』（吉川弘文館）という、ザビエル来日に始まるキリシタンの文化を、人間の一生に照らして叙述したユニークな著書がある。八代市立博物館学芸員の島津亮二氏の講演には、実際の地図の写真が示されていて、一六四〇年フランス製の日本図には、確かに Yatuxiro と Vto の表示を見つめることができる。

『戦国廢城紀行—敗者の城を探る』（澤宮優、河出書房新社）は、「歴史は常に権力者の側から作られ、歪曲されるといふ厳然たる事実」を、敗者の城から



見つめ直すという変わった趣旨の本で、十二城が取り上げられている。著者は八代生れで宇土高校出身、高校の考古学クラブで宇土城発掘の手伝いをした経験を持つ。本にはもちろん宇土城も含まれており、市街地近くに築かれた城に、堺の商人の家に生まれた行長の、「戦うことよりも、城下町を整備し、街づくりに力を入れた」思想が伝わり、南蛮貿易とキリスト教から「さらにヨーロッパまで視野に入れた国のあり方を考えていたのではないか」との思いがする、と書かれている。行長が八代に築いた麦島城も、「海外貿易、輸送の拠点、近代的な城下町作りに適した平城」として入江に面した水城だったが、地震で倒壊して地中に埋もれ、人々から忘れ去られた。八代でも、行長の話がされることはほとんどなく、彼の資料は消されたと考えられてきた、という島津亮二氏の話が著者は紹介する。しかし、新資料発見や発掘調査で見直しがなされつつあるという。

小西行長と加藤清正に、豊臣秀吉から肥後が半分ずつ与えられたとき、球磨郡は相良氏に与えられた。郷土史家の勇知之氏の『肥後の海史 海を忘れた肥人—海外交流とキリシタン』（書肆月歌舎）には、「相良氏は一時キリシタンの信仰も厚く、実は長く隠れキリシタンだったとの説もある」と書いてある。そのことを強く主張しているのが、郷土史家の原田正史氏が昨年十一月に出版した『驚愕の九州相良隠れキリシタン—前代未聞の歴史的真相』（人吉中央出版社）である。同氏は次のように書いている。相良家も相良藩も隠れキリシタンとは無関係で、球磨地方は隠れキリシタンと無縁の地であるとするのが正統な歴史認識とされ、今日に至っているが、相良藩はキリシタン禁止令に服従する態度を見せながら、内実はキリスト教信仰に寛容な姿勢を持ち続けたため、球磨地方は江戸時代を通じ、隠れキリシタンにとって安住の楽園であった。そして、墓碑類等に刻記されたキリシタン指標と名付けられた特有の図形や模様、文字などを示すとともに、筆頭家老相良清兵衛の屋敷地下室遺構は、西欧の中世キリスト教洗礼池と類似の貯水池を伴う秘密礼拝所と考えられるとし、隠れキリシタン建造物の証拠に挙げている。八十五歳を迎えた著者の調査研究十五年目の結論であり、読み応えがあった。

『肥後の海史』と『天草キリシタンガイドブック』

（天草中央キリスト教会）を参考にすると、肥後南部の約二十四万石のほかに天草の島々の監督権を与えられた行長はキリスト教を保護し、天草五人衆（天草を支配した五人の領主）征伐後はさらに盛んになった。島内には宣教師を養成するためのコレジオ（天草学林と呼ばれる）が作られ、語学や哲学、文学、神学のほか天文学、暦学、気象学なども教授された。天正少年使節団が持ち帰った日本初の活版印刷機を備えた印刷所も併設され、『伊曾保物語（イソップ物語）』などの印刷物が刊行された。これらは天草本と呼ばれ、三十六種類のうちの十二種類が現存する。天正少年使節団については、『クアトロ・ラガツィー—天正少年使節と世界帝国』（若桑みどり、集英社）が、壮大な歴史物語を読むようでとても面白かった。織田信長が明智光秀に討たれた背景の説明には説得力がある。

この少年使節四人（伊東マンショ、千々石ミゲル、中浦ジュリアン、原マルティノ）の随行者の中に、コンスタンティーノ・ドラードという日本人の少年がいた。ドラードは、使節を計画したイエズス会の巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノの考えで、使節の世話をしながら、印刷技術を習得させるために一行に加えられた。『活版印刷人ドラードの生涯—天正少年使節の活版印刷』（青山敦夫、印刷学会出版部）で、青山氏はドラードを、ポルトガル人の混血児で、諫早に生まれ、教会関係者に拾われて養育されたとしている。若桑は、「印刷技術を輸入して教えを広めるという計画は、ヴァリニャーノにとって使節派遣と同じほどだいじだった」と書いて、青山氏の本を「このような本が出たことで、使節のかげにかくれて、しかもたいへんだいじなことをしたのに、歴史の下に沈んでいたもうひとりの少年が日の目をみることになった」と評価する。

青山氏の本は小説仕立てになっており、それによると、ドラードはリスボア（リスボン）で半年ほど印刷の修行をして、帰途、ゴアとマカオで実際に印刷を始めている。八年ぶりに使節団が日本に帰り着くと、その三年前に秀吉が伴天連追放令を發布しており、印刷所は当初は島原半島南部の加津佐に設置されたが、約一年半後には天草に移されることになる。ここで、天草本が印刷されたのである。しかし、江戸幕府から禁教令が出されると、ドラードたちはマカオへ脱出することになり、印刷機も持ち出した。

マカオで彼は司祭に叙階されて、セミナリヨの院長を務め、亡くなると聖パウロ教会に、ヴァリニャーノ、リスボアで一緒に印刷を学んだ日本人修道士ロヨラ、使節の一人原マルティノと並んで葬られた。この教会は現在は、焼失してファサードのみになっているが、聖ポール天主堂跡として世界遺産の一部になっており、私も訪れたことがある。

なお、セミナリヨとは、『天草キリシタンガイドブック』を参照すると、司祭・修道士育成のための初等教育機関（小神学校）のことで、天草では志岐に置かれた。同地には司祭たちの常駐するレジデンシアや画学舎もあり、日本イエズス会の重要な拠点となった。画学舎では、画家でもあるジョアン・ニコラオ神父の指導で、宗教画、水彩画、銅版彫刻、オルガン製作まで行なわれた。ニコラオは信長の肖像画を描いたことで知られる。

名前から分かるようにヴァリニャーノはイタリア人で、若桑によれば、イタリア中部のアブルッツォ州キエーティの貴族の家系に生まれている。キエーティは十六世紀に司教座が置かれた同州の中心で、独自の出版所や神学校を持つ学問の中心でもあった。彼が日本に来て、コレジオや出版所を建てたことも当然うなずける、と若桑は書いている。インド・アジア管区の巡察師となった彼は、日本だけでなくインドやフィリピンなどの視察官でもあり、中国には弟子のマテオ・リッチを派遣した。リッチは、昨年本誌で少し触れた徐光啓らの協力を得て、キリスト教の伝道を行なうとともに、西洋の科学技術を伝えた。

ザビエルやヴァリニャーノ、リッチらの所属するイエズス会は、大航海時代になってから結成された新鋭の宗教集団で、世界布教を行なってカトリックを世界規模に広げることを第一の目的としていた。その布教政策は適応主義政策と呼ばれ、摩擦を避けて、できるだけ現地の文物や習慣に順応して行なう布教法である。これはヴァリニャーノが初めて唱導したと思われるが、彼以前から在日イエズス会宣教師たちは実践していたと『イエズス会の世界戦略』（講談社選書メチエ）で高橋裕史氏は指摘し、旧来の論理は修正すべきであると書いている。しかし、ヴァリニャーノが強くそれを求めたのは事実で、「我々は日本人の間で生活しているのであるから日

本人の習慣に適応しなければならない」との指示を出している。同じ著者の『武器・十字架と戦国日本—イエズス会宣教師と「対日武力征服計画」の真相』（洋泉社）は好奇心を煽るタイトルであるが、その結論は次の通りである。

当時の東インド領国でのポルトガルの軍事力を鑑みると、日本がポルトガル＝イエズス会に征服されなかったのは、決して「偶然」などではなく「必然」だった。江戸幕府が抱いていた、イエズス会とポルトガル、そしてスペイン勢力による日本の軍事征服に対する危惧は、杞憂にすぎなかったのである。

若桑の本に戻ると、ヴァリニャーノは、日本人の心や習慣に自分を合わせようとしなかった布教長フランシスコ・カブラルを解任した。

カブラルはスペイン・ポルトガル、つまりイベリア半島独特の国家意識をもつ、もと軍人だったので、植民地の人間を力で支配するという、宗主国の考えからまったく抜けることができなかった。そしてこの大航海時代のスペイン・ポルトガル人の常として、自分たちが劣った民族を発見した主人公だという誇りや傲慢さをどうしても捨てることができなかった。いっぽうイタリアはアメリーゴ・ヴェスプッチやクリストフォロ・コロンボなどの大航海者を個人として出すだけの科学的先進国ではあったが、小国に分裂していて絶対主義大国をつくらなかった。（中略）国家意識は薄く、植民地主義からもかなり遠く、それぞれ自分の生まれた小都市国家を誇りにはするものの、基本的に個人が世界の中心だと思っていた。イタリア人はその国家を誇るのではなく、自分自身の能力を誇るのである。

リッチやニコラオ、「秀吉と信長に信頼され、都の日本人にこよなく愛され」た宣教師ニエッキ・ソルディ・オルガンティーノもイタリア人だった。ヴァリニャーノの巡察師任命には、カトリック教会とスペイン・ポルトガル国家の関係も関係していたが、彼自身も、征服国家であるスペインからは日本や中国に来ないよう、イエズス会総長に依頼している。

『銃と十字架』（遠藤周作、中央公論社）によると、実際、秀吉が突然伴天連追放令を出した時、同会日本副管区長だったガスパール・コエリヨは、キリシ

タン大名たちを通して撤回を願い出るとともに、密かに一戦を交える決意を固め、武器・弾薬等の軍需品を準備させ、行長や有馬晴信たちに秀吉と戦うよう工作したり、フィリピン総督に支援を要請したりした。これらは失敗に終わったが、翌年コエリヨの招集で集まった六人の宣教師のうち五人が賛成して、帰国途上にあった少年使節とともにマカオにいたヴァリニャーノに、フィリピンから兵士や食糧・弾薬を用意して日本に戻るよう要請することを決めた。五人の中には、有馬セミナリヨの校長メルキオール・デ・モーラ神父と『日本史』で有名なルイス・フロイスも含まれている。コエリヨとフロイスはポルトガル、モーラはスペイン出身である。唯一の反対者はオルガンティーノだった。もちろんこの計画にヴァリニャーノが同意することはなく、彼は「今後の日本布教はすべて慎重に、決して権力者を刺激しない」方針を固めていた。

遠藤の小説は、「日本のマルコ・ポーロ」と称されるペトロ・カスイ・岐部を扱ったもので、国東に生まれた岐部は有馬のセミナリヨと、江戸幕府から追放されてからはマカオのコレジオで学んだ後、ローマで司祭に叙階された。入国が禁止されていたため苦勞して帰国し、潜伏しながら信者を励ました。小説は、祖国から脱出したことを悔い、殉教の覚悟を決め密入国して、厳しい拷問にも棄教せず、ついに殉教する岐部の内面を描く。小説の前半部分には、有馬のセミナリヨを取り巻く状況が詳しく説明されている。マカオのコレジオは聖ポール天主堂に隣接して建てられていた。小説から引く。

不幸にしてこの学校と教会とは一八三五年の大火で焼失し、今日、マカオを訪れる者はその大火に黒く焦げた前面壁を見るだけである。だが、日本人切支丹たちもその建設工事に協力したといわれるこの建物は、一六〇二年の完成時にはうつくしいアーチ型の屋根を持ち、金箔と朱と青の壁を持ち、海上からマカオの丘を見上げる者の眼に何よりも早くうつただろう。

マカオの歴史を知るには、切手を通して世界中の歴史や地理などを紹介している郵便学者・内藤陽介氏の『マカオ紀行—世界遺産と歴史を歩く』（彩流社）がお薦めである。

しかし結局、江戸幕府にとっては、「キリスト教

排除は日本の権力者の基本方針であって、その口実は何んでもよかった」として、次のようにまとめられている。

幕府はポルトガル・スペインというカトリック国とイギリス・オランダという新興新教国の世界覇権の争いの余波を受けており、十七世紀半ばの世界情勢のただならぬ変動を感じとってみずから国を閉ざす道を選んだことがわかる。(中略) スペイン・ポルトガルには日本を征服する国力も意志もなかったにもかかわらず、国民の愛国心に訴えて仮想の外敵を作り上げ、国民の心をひとつに引き絞った。そのときキリシタンは二重の意味で血の制裁を受けなければならなかった。ひとつには、スペイン・ポルトガル帝国のスパイであるという理由によって、もうひとつは神道の敵すなわち国体の敵であるという理由によってである。

若い頃イタリアに留学した経験のある著者は、この本で大佛次郎賞を受賞したが、先年惜しくも亡くなった。大佛次郎賞は、ウィキペディアによると、「日本語の散文作品として質が高い作品、人間精神への鋭い洞察を含む作品、歴史・現代文明の批評としての意義が高い作品に与えられる」そうで、同書の受賞には納得がいく。

イタリア出身で、世界的な大手銀行数社に勤務、滞日歴が三十年に及ぶヴィットリオ・ヴォルピ氏には『巡察師ヴァリニャーノと日本』（原田和夫訳、一藝社）という著作があり、また経歴を活かした『賢者の「営業力」—日本進出の成功例、宣教師ヴァリニャーノの教え』（大上順一訳、PHP 研究所）もユニークである。さらに、イエズス会関係では、『幻の帝国—南米イエズス会士の夢と挫折』（伊藤滋子、同成社）が興味深い。南米のアルゼンチン、ブラジル、パラグアイにまたがるグアラニ・ミッションは、イエズス会がグアラニ族の間に築いた約三十の村からなる教化村である。ここで、宣教師たちは先住民をスペイン人やポルトガル人から保護し、ともに宗教的で文化的な生活を送った。その「理想郷」は約百五十年間続いた後、一七六七年、イエズス会がスペインから追放されたことにより崩壊した。ポルトガルもフランスも既に同会を追放しており、伊藤氏は「端的に言ってイエズス会は大きくなりすぎていた」と書いている。

## Ⅲ

大佛次郎は日本近代史の中で特に隠れキリシタンに注目していた、と書くのは小岸昭氏の『隠れユダヤ教徒と隠れキリシタン』（人文書院）で、大佛が隠れキリシタンについて高く評価した点は、マラーノと呼ばれる隠れユダヤ教徒とも共通性があると指摘している。

国民生活を恐怖政治によって一つの宗教に一体化しようとした権力者の絶対主義的な社会構造の「内」に生きながら、「外の思考」を生きて来たということ、そしてカタストロフィーの状況を、「隠れ」のテクニックを駆使しながら人間としてまだ生きてゆくことができるような状況に変えていったということである。そして、徹底的に受動性を引き受けるその外観とは裏腹に、隠れキリシタンもマラーノも、自分たちの「外」なる根源的な信仰を維持し続けることによって、封建体制を切り崩し、真に近代化を推し進める力となったのである。

この本はユダヤ思想を研究する著者が、上記の共通性を手掛かりにマカオから長崎の生月、外海、五島、そして旅の終わりにルイス・デ・アルメイダ終焉の地である天草の河内浦を訪ねるものである。アルメイダの名前は、イエズス会の日本布教史上欠かすことができない。小岸氏は、アルメイダがマラーノの家系に属していたことを知り、貿易商人として財をなした彼が靈魂救済の道へと向かう二重性と、隠れキリシタンとの比較を、彼が奉仕し、救った人々、彼を尊敬し愛情を抱いた人々の住んだ地域で行なった。マラーノについては著者の『マラーノの系譜』（みすず書房）や、『スペインのユダヤ人』（関哲行、山川出版社世界史リブレット）が詳しい。小岸氏の本で私が最初に読んだのは、徳永恂氏との共著『インド・ユダヤ人の光と闇—ザビエルと異端審問・離散とカースト』であり、その帯に、「大航海時代とザビエルらの世界不況がまきおこした全地球的規模の波動。文明の背後に伏流するキリスト教普遍主義やディアスポラの軌跡をインドの地に生きるユダヤ人たちの歴史から照らし出す」とあって、惹き付けられた。

再び『クアトロ・ラガッツィ』を開くと、若桑は次のように書いている。

アルメイダを知ったからこそ、私にはすべてが見えてきた。世界帝国がはりめぐらせたグローバルな経済網、そのエージェントである冒険家たち、そして彼らとともに、アジアに大量に押し寄せたキリスト教宣教師たちが、いったいなにを考えていたのかが。投機的な世界経済と、キリスト教の世界布教の双方を一身に体現していた。

アルメイダはポルトガルで外科医として開業できる資格を得た医者だったことが近年の調査で分かっている。しかし医者にはならず、インドに出かけた。彼の入信の理由ははっきりとはしていない。アジアで交易する商船に必ず乗船していた宣教師に洗脳されたか、共感したかと若桑は想像する。日本に上陸したアルメイダは、府内（現在の大分市）に日本で最初の病院を作るために財産を寄進した。貧しい人々を救うために、儲けた金と医師の腕を役立てることが、この世で行なうべき仕事と思ったのである。この病院にはハンセン病棟もあり、それは極東で最初のものであった。キリストの教えの基本は慈愛にあって、戦国末期において下層民は貧窮しており、キリスト教が救済事業を行なったため、信者は急増し、伝道後数十年で九州の人口の三十パーセントを超える三十万人に達した。『貧者を愛する者—古代末期におけるキリスト教的慈善の誕生』（ピーター・ブラウン、戸田聡訳、慶應義塾大学出版会）は、四世紀から七世紀にかけて、「貧者への愛」が公的徳目になる過程を描いて興味深い。

医師の東野利夫氏は『南蛮医アルメイダ—戦国日本を生きぬいたポルトガル人』（柏書房）で、アルメイダらが府内に建てた洋式病院の位置を特定し、建物の考証を行なった。イエズス会による医療禁令や庇護者であった大友氏の衰退などにより、府内の病院は終焉、アルメイダは開拓伝道士として九州各地を経巡ることになる。東野氏は、開拓伝道士としての足跡をアルメイダ自身の書簡を挿みながら記述しており、書簡史料から推測すると道程の全体は、道なき道を二万一千三百キロにも及んでいるそうである。福岡在住の戦国史家吉永正春氏の『九州のキリシタン大名』（海鳥社）にも、口之津を発ったアルメイダが、日田に布陣していた大友宗麟に会いに行った時の長文の書簡が引用されている。『肥後の海史』には、アルメイダらの通った豊後から肥後を

通り肥前に向かうルートや、肥後から薩摩に向かうルートなどが記載されている。

『南蛮医アルメイダ』は一九九四年度のロドリゲス通事賞を受賞している。ポルトガル大使館のウェブサイトを見ると、この賞は元ポルトガル大使館翻訳官の故ジョルジュ・ミドリカワの寄付により設立され、「日本で出版されたポルトガル人作家の作品の翻訳本やポルトガルに関連するテーマの作品に毎年与えられるもので」ある。ジョアン・ロドリゲスは、信長や秀吉の通訳（通事）にもなったイエズス会宣教師で、ツツと呼ばれた。

小岸氏は、アルメイダの墓は、禁教時代に権力者により破壊されたか、信者により隠され地中深く眠っているか、と推測している。フロイスの『日本史』には、次のように記されているそうである。

師の病気が悪化して、すでに死期が近づくと、（彼がいた）貧しい家はキリシタンたちで溢れた。人々は司祭の足に接吻するためにそこに来て、彼（の死）を惜しんで泣いた。彼は、それらの人々に対して、もう話すことはできなかったが、明るい喜びをたたえた面持ちを現して彼らを慰め、あたかもそれは彼らとともに連れて行こうとするか、あるいは一同を体内に収めて行こうとしているかのようであった。

同氏は、

隠れユダヤ教徒として疑いの目で見られ、いつ迫害の手が伸びてくるかわからない祖国ポルトガルやゴアで生きるよりも、自由に医者として、宣教師として力を尽くし、「キリシタンであると異教徒であるとを問わず、この上もなく愛された」この極東の島を永住の地として選択したことが結局自分にとっては幸せだったのだと、「貧しい家」でくり返し思ったことだろう

とフロイスの記述を引用している。アルメイダの死は、一五八三年、少年使節がヨーロッパへ旅立った翌年のことだった。

京都で一六四三年頃、小西行長の孫と推定されるマンショ小西神父が殉教した。『銃と十字架』には、マンショは行長の娘小西マリアの子で、有馬セミナリヨではペトロ岐部のはるか後輩にあたり、日本とともに脱出、マカオに学んだ後、ゴアから海路ヨーロッパへ向かい、岐部と同じくコレジオ・ロマーノ

で神学を勉強した、とある。岐部はマンショより一、二年前にアラビア砂漠を横切る陸路でローマに向かい、途中日本人として初めてエルサレムを訪れている。

マンショの殉教により、日本で宗教活動を行なう神父はいなくなった。ただし、日本人伝道士バスチャンが浦上、外海地方で活動していたという伝説の色彩を帯びた話が伝わっており、「七代経ったらコンヘソーロ（告白を聴く神父）が黒船に乗ってやって来る」という予言が、隠れキリシタンたちの中で生き続けていたのは確かである、と小岸氏は書いている。このバスチャンの予言は『新版 キリシタン伝説百話』（谷真介、梟社）に収録されており、予言から七代二百五十年経って、本当にコンヘソーロが黒船に乗ってやってきた。そして、「外海のキリシタンたちは、フランスからやってきたプチジャン（プティジャン）神父が大浦天主堂を建てて司牧をはじめた時、“バスチャンの予言”が正しかったことを知った」のである。『西海の天主堂路』には、一八六二年に来日したベルナル・プティジャン神父は、一八六五年の潜伏キリシタン発見を長崎で経験し、翌年の大規模な弾圧「浦上四番崩れ」の信徒の解放に尽力した、と書いてある。

予言といえば、天草で布教活動を行ない、徳川家康による禁教令でマカオに去ったマルコス・フェラロ神父が遺した「末鑑の書」という預言書がよく知られている。二十六年目に善人が生まれると書いてあり、ちょうど二十六年目に生まれた天草四郎が総大将に選ばれた。『天草キリシタンガイドブック』を見ると、フェラロ神父がいた南蛮寺は上津浦の正覚寺にあったとされている。ここで発見されたキリシタン墓碑にはイエズス会のHISの紋章が入っていて、全国に四基しかないうちの二基がここにある。

『新版 キリシタン伝説百話』は、キリシタンに関する伝説を集め、許教時代、弾圧時代、禁教時代の三期に分けてまとめたもので、「奇瑞、奇蹟譚、殉教譚をはじめ、限りなく事実に近い事蹟の伝説、摩訶不思議、奇想天外、荒唐無稽なキリシタン魔術、妖術譚まで多種多彩」な内容には興味が尽きない。バスチャンに関する話はほかにも二話ある。許教時代には、行長が領内の神社仏閣を焼き打ちしたことが災いして、それ以来収穫ができなくなったという話が収められている。余談になるが、同時代の話の中には、大久保長安の幕府顛覆計画も収録してある。

これは、猿楽師から三万石を領するまでになった長安が、ポルトガル人と九州のキリシタン大名が手を組んだ大それた計画の首謀者として、七人の子供まで切腹させられた事件である。長安は、秦氏の末裔であり、佐渡や石見の金銀山を開発したことで知られる興味深い人物であり、『江戸の金山奉行 大久保長安の謎』（川上隆志、現代書館）や『世界史の中の石見銀山』（豊田有恒、祥伝社新書）が面白い。川上氏によると、長安キリシタン説もあるらしい。

禁教時代には、朝妻という遊女のキリシタンが江戸のキリシタン屋敷につながっていた話がある。詳細な著者注によると、この屋敷は南蛮から潜入した宣教師を拘置するために設けられた。長い禁教時代の最後に潜入したのは、一七〇八年、屋久島に上陸後すぐに捕らえられたイタリア人のジョヴァンニ・バッティスタ・シドッティ神父である。新井白石はシドッティを尋問して『西洋紀聞』などを書いた。白石は、「キリシタン教法がわが国を謀ることはない」といって、本国へ帰すことを上策として幕府に上申したが容れられず、シドッティは幽閉されたまま衰弱死した。シドッティについては、『密行—最後の伴天連シドッティ』（古居智子、新人物往来社）や『奇会—新井白石とシドッティ』（垣花秀武、講談社）が詳しい。キリシタン屋敷とシドッティについて研究した、クロドヴェオ・タシナリ神父の『殉教者シドッティ 新井白石と江戸キリシタン屋敷—研究と戯曲』（ドン・ボスコ社）も貴重である。坂口安吾の『安吾 戦国痛快短編集』（PHP 文庫）に収録されている「イノチガケ—ヨワン・シローテの殉教」もシドッティを取り上げている。シドッティが持っていた絵画「親指の聖母」は現在東京国立博物館に所蔵され、重要文化財となっている。

#### IV

クアトロ・ラガッツィ、四人の少年使節が帰ってきた日本の状況は、出発前と同じではなかった。前述のように秀吉は伴天連を追放し、キリシタンの保護者である大村純忠、大友宗麟も死去していた。使節の帰国の年には、行長の天草合戦での勝利が確実となり、翌年のヴァリニャーノらとの会談の後、前述のように天草にコレジオが移された。秀吉の迫害から逃れるためである。『天草キリシタンガイドブック』によると、コレジオの敷地内にはほぼ同時に

修練院（ノビシアド）が設置された。司祭になることを決心した四人は、この修練院に入った。さらにコレジオで教育を受けた彼らのうち、千々石ミゲルを除く三人はマカオのコレジオに移り、司祭に叙階された。しかし、彼らの運命はそれぞれ、病没、殉教、亡命であった。

ミゲルは棄教して、どこで亡くなったかは不明である。原田正史氏は、千々石家と相良家家臣千々岩家との関係を調べていたが、二〇〇三年、諫早市多良見町でミゲル（清佐衛門と改名）の墓石が発見されたそうである。若桑は、「ミゲルはファビアンと同様に、まずはマカオ留学に落ちたことを契機としてイエズス会内部での自分の将来に見切りをつけて会を去ったことは疑いが無い」としている。しかし、信仰上の疑問から会を去った可能性もあるらしい。ファビアン（ハビアン）とは不干斎ハビアンのことで、棄教後は強力な背教者となった。『不干斎ハビアン—神も仏も棄てた宗教者』（釈徹宗、新潮選書）は一読の価値があると思う。

若桑は、西洋文化を学ぶ者にとって、西欧哲学の理解の困難さは、常につきまとう問題であると書いている。

西洋文明に接した日本の知識人の態度はふたつしかない。全力で相手にくらいつきマスターするか。自分が第一人者でいられる日本に回帰するか。第三の道は、おそらく西と東のあいだに橋を架けることである。しかし、そのためには、その双方を学ばなければならない。この苦悩を感じなかった西洋研究者はいないであろう。使節の四人は少年のうちに西洋に渡り、八年間も旅をし、西洋の社会を見て、その学問を学んだ。帰国後も修練院、コレジオで勉学に励み、それぞれ自分の道を歩んだ。

彼らが見聞きした西洋の社会、法と正義、民主の歴史は戦国末期の日本社会で生きた結果を生み出さなかった。しかし、それは彼らが傑出していなかったからだろうか？彼らが傀儡だったからだろうか？いったいだれが、封建制の上に立つ絶対権力を組織化していくさなかの日本で、法と正義と平和の主張をなしたであろうか？若桑の答えはこうである。

少年たちが見たもの、聴いたもの、望んだものを押し殺したのは当時の日本である。世界に扉

を閉ざし、世界を見てきた彼らの目を暗黒の目隠しで閉ざしたのは当時の日本である。それでも、彼らは、自分たちの信ずることを貫いて生き、かつ死んだ。(中略) 人間の価値は社会において歴史において名前を残す「傑出した」人間になることではない。それぞれが自己の信念に生きることである。

『神の発見』で森氏は、「ヴァチカンの内部には、すごいハイテクの情報処理システムが完備されている」といっており、世界中の教区からの報告や、大使館、修道院、宣教師からの情報、一般信徒が持ち寄る情報など、複眼的な情報が集まるという。それは、平和のために使われるという。『イエズス会の世界戦略』によると次のようになる。

イエズス会は、会創設の頃より個別布教地の情報をローマの会本部が把握して、それらの布教地を一元管理し、また、布教地相互のあいだでも情報の交換をおこなって、他の布教地や同僚たちの状況をつねに視野に入れるシステムを確立した。つまり、情報による布教地と駐在会員にたいする「縦系列の把握・管理」と「横系列の把握・管理」をおこなっていたのである。

ヴァリニャーノの『東インド巡察記』もそのような目的で書かれ、全四十章のうち三章が日本の情報に充てられ、全般的な記述とともに、京都、長崎、平戸、天草、豊後などの個別の布教地について詳細に記述されている。当時、日本はイエズス会の布教対象として垂涎的であり、ヨーロッパのイエズス会関係者から日本に関する情報が強く求められていたと高橋氏は書いている。

情報を収集し、分析し、発信することは重要である。本文は天草をキーワードにして書くつもりだったが、それから広がる情報は広がるばかりで、きりが無い。クアトロ・ラガツィが得てきた西洋の情報は、日本で役立てられることがなかった。しかしそれは、宣教師たちがもたらした情報と同様に、信長や秀吉、家康の為政に役立ったはずである。禁教時代に潜伏キリシタンとなった人たちは二百年以上も自分たちの信仰を守り続けた。彼らとスペインのマラーノには共通性がある。スペインとポルトガルは日本を植民地にすることはなかった。大航海時代を制覇した両国は、十七世紀後半から没落に向かう。

イエズス会は世界布教に乗り出し、情報を集めた。南米では「理想郷」を築いたが百五十年ほどで潰えた。イエズス会自体も、十八世紀から十九世紀にかけて、追放・禁止の憂き目を見た。為政者や「傑出した」人物のことは私には分からないが、これまで名もない人々が営々と行ない、積み重ねてきたように、私たちが「自己の信念に生きる」ためには、情報が必要であろう。ただし、情報を扱うのは人間であり、まず「信念」があり、そしてそれを「貫いて生きる」ことが求められる。

遠藤は、『銃と十字架』で次のように書いている。「有馬神学校は日本人が最初に西洋を学んだ学校」であり、それは幕末や明治、我々が考える西洋ではない。「切支丹時代の西洋とはあくまで基督教であり、基督教を中核として動いてきた西洋で」、「日本人は西欧の垣塙で鍛えられた基督教とそれを信ずる国と正面から対決せねばならなかった。」神学校の生徒や卒業生は、「基督教と基督教国との矛盾」にぶつかった。この矛盾を克服できなかった卒業生は棄教した。千々石ミゲルもそうである。

この矛盾は当時の西洋の矛盾にほかならなかった。(中略) だから有馬の海べりに創設されたこの小さな学校には基督教という西洋の中核思想と共に、西洋の罪過と過失も同時に含まれていたのだ。

ペトロ岐部は「この矛盾を解こうとして半生を費した。その殉教は彼の結論であった。」彼も自己の信念に生きたのである。

ヴァリニャーノは四百年以上前、日本にコレジオと出版所を作るのに力を注ぎ、それらは天草に存在した。『天草本 伊曾保物語』に収められたイソップ自身の生涯の物語を、天草出身の女性を中心にあって造形絵本にした『ESOPO—イソップの生涯の物語』(中川哲子、gaju、下曾山弓子、熊日情報文化センター)という本が近年出版されている。内容は、古代ギリシアに生きたイソップが、知恵に優れ、奴隷の身から解放される教訓的な話となっている。絵本が完成するまでの様子も写真とともに紹介されていて、主人公イソポの登場シーンは水の平焼の窯元で撮影されている。水の平焼は天草でも古い歴史を持ち、海鼠釉の焼き物は私の好みである。

天草工業高校機械科では、活版印刷を再現する活

版印刷再現プロジェクトを行っており、ウェブページに、実際に活字を製作する過程の写真が掲載されている。歴史と技術を学ぶ有意義な取り組みであると思う。どちらの取り組みも素晴らしい試みであり、これからも天草から世界に発信して欲しい。

蛇足になるかもしれないが、五木氏のいう「洋魂」に関して、「複眼的な情報」を提供するために書いておくと、『異相のヨーロッパ—神教と支配意識の構造』（海原峻、マルジュ社）という本は他の本からの引用を交えながら次のようにいっている。聖書の知識がないから日本人にはヨーロッパ人の考え方が分からないというのが、聖書発祥の本来の地に戻って、欧米に偏ったずれ、焦点の曇りを直す必要がある。また、「ヨーロッパの文化はキリスト教の文化であり（中略）聖書を抜きにしては、ヨーロッパの文化は考えられない。しかしそれはヨーロッパ人の聖書理解が何であるかを知ろうとする時の話であって、ヨーロッパ世界そのものが聖書の世界ではない。」

追記：脱稿後も、何冊か関連の本を読んだが、高校まで天草で過ごした著者による『よみがえる明治の宣教師 ハルブ神父の生涯』（廣瀬敦子、サンパウロ）は、パリ外国宣教会による日本宣教師が大変よくまとめられていてお薦めしたい。ハルブ神父の故郷をノルマンディーに訪ねる旅は感動的で、著者は同家の墓地で、「この家族の中から一人の宣教師を東洋の果てまで送り出したかげには、大きな犠牲が払われていた」とつくづく思う。「一人の宣教師が布教地で一生を終える重みは、一世紀を経てもお互いの心を強く結ばせるものである。」フランスの小さな村と、日本の小さな島との関係性に目を開かせられた。なお、大浦天主堂を建てたのは天草出身の大工棟梁、小山秀之進だそうである。

## 図書館のバイトを通して

情報通信工学科4年

堀田果梨

図書館の仕事を少しでも手伝うことが出来るのは、私にとって魅力的な事でした。多くの希望者から何とか選ばれ、今では約週一でカウンターに座ることが出来ます。図書館の静かな空間はとても好きです。勉強をする場としても学生から人気の場所ですが、やはり本を読んでこそその図書館でしょう。カウンターにいと、本を貸し借りする人にも注目します。沢山借りる人や少しだけ借りる人、いつも来る人や珍しい人、よりどりみどりで。この人はこんな本を読むんだな、この本はどんな物語なのかな…と考え出すととても楽しいのです。時には顔を覚えられて、話しかけられることもありました。友好関係が増える事も図書館バイトの魅力の一つだと思います。勤務時間の間、特にやる事が無くなった時は、図書館から本を一冊だけ借りて読みます。その分、本を読む量も多くなりましたし、新刊もすぐに分かる位置にいるので、気になる本はすぐに手に取ることが出来ました。その他の仕事は、鍵の管理、図書館の戸締りなどでしょうか。警備員さんと話せる機会もありました。私は寮生なので勤務が8時までの時は、延食を頼み一人で食事します。学校が自宅から遠い人は少し大変だと思います。土曜日にも勤務時間があります。テスト前以外はなかなか人が来ませんが、この時間も何もしなければゆっくりと本を読むことが出来ます。4年生なので勉強にも忙しくなりますが、週一という無理のない勤務時間ですので勉強への影響は少ないと思います。ちょうど良いです。ちなみに、溜まったお金はほぼ貯金に回しましたが、少しだけ好きな本につき込みました。図書館で出会った本でしたが、本当に好きな本はずっと手元に置いていたかったです。お金以外にも、図書館のバイトではいろいろな物を得ることができました。3年生のあの時、この仕事に志望して本当に良かったと思います。



## 図書館アルバイトを通して

情報通信工学科4年

山 隈 みゆき

図書館の学生アルバイトはとても楽しいものだった。私はこのアルバイトができたおかげで、「図書館で働く」という夢が叶った。昔、ある映画に出てきた司書さんが格好良く、司書という仕事を知り、それからこの仕事に憧れを持っていた。それがこの学校に入ってから図書館アルバイトという形ではあるが、実現するとは思っていなかった。実際、このアルバイトはとても楽しかった。遊びに来てくれた友達と話すことはもちろん楽しかったが、今まで話したことのない人とも話すことができた。また、返却された本は見たことのない本がたくさんある。それらの中から自分も借りて読んでみて、自分のお気に入りの本となったものもいくつかある。ブックハンティングで購入され、新しく図書館に入荷された本はどのようなものか、というのもすぐに分かる。

また、今年度から ICT 活用学習支援センターの整備により図書館は改修され、新しく ICT 活用学習ルームができた。新しくなった図書館は勉強机が増え、図書館利用者が自由に蔵書を検索できるノートパソコンが置かれたり、個室である学習ルームもできたり、今まで以上に勉強しやすい環境となった。そのおかげもあり試験前や試験期間中になると図書館も ICT 活用学習ルームも学生で満席となり、全員が試験勉強に励む。そのような光景を見ると、私自身もやる気が出て勉強に勤しむことができた。試験期間中の図書館はものすごく静かで、利用する学生全員のマナーの良さにも気付いた。

1年間という短い期間であったがこのアルバイトのお陰で読書する時間が増えたり、友達が増えたり、読む本のジャンルが増えたり、私にとってプラスになることばかりだった。図書館アルバイトに応募して本当に良かったと思っている。ぜひ、今まで図書館を利用したことがない人にもどんどん利用してもらいたいと思う。

## 図書館勤務を通して

電子工学科4年

山 田 理 園

4月から1年間、学生アルバイトとして図書館勤務をし、私はたくさんのものを得ました。

初めて仕事をする日、ドキドキと不安でいっぱいでした。しかし昨年、学生アルバイトとして図書館勤務をされていた5年生の先輩方や、図書館職員の方々が丁寧に仕事を教えてくださり、私も早く仕事を覚えようと必死でした。

仕事に慣れ始めた頃、気持ちが少し緩んでしまう時期でした。私は来館した友達とお喋りに夢中になってしまい、後日そのことについて指摘されてしまいました。このとき、自分には「責任感」という言葉が欠けていたことに気がきました。図書館勤務をしているときは、この学校の学生であると同時に、仕事を任されている1人の職員である、という自覚が不足していたのです。社会に出て働き始めたら、私たちは責任という言葉と向き合うことになります。私は自分の身勝手な行動を振り返り、反省しました。自分に与えられた仕事に責任を持つ、当たり前のことですが、忘れがちな、そんなことを学ぶことができました。

時には、貸出や返却の手際が悪かったり、失敗をしてしまうこともありました。しかし、貸出や返却をしたあとに言われる「ありがとう。」という感謝の言葉をかけられたとき、私はこの仕事にやり甲斐を感じるようになりました。

今振り返ってみて、完璧に仕事をこなせたとは思いませんが、自分なりにどうやったら、来館される人にとって図書館が快適な場所になるか考えることができました。私は、図書館がただ本を借りたり、勉強をするだけの場所ではなく、人と人のコミュニケーションの場になってほしいと思います。特に、グループ学習室や AV ルームはそのような場になると考えています。これらの便利な設備を利用して、楽しい時間を過ごしてほしいです。

最後にこの一年間、図書館勤務を通して得たものは、一生忘れられないものとなりました。次に学生アルバイトとして図書館勤務をされる後輩にも、この仕事を通してたくさんのことを学んでほしいです。

## 学生図書職員を通して

電子制御工学科4年

田上 朋和

今年度から図書館が新しくなりました。新たに書物検索用のパソコンや、学習ルーム及びICTセンターの追加によりとても使いやすくなったのではないかと思います。昔の広々とした図書館も好きでしたが、今の便利になった図書館も大変良いと思います。なにより、この新しくなった図書館の最初の学生図書職員になれたことを嬉しく思います。

さて、学生図書職員をやらせていただいた感想ですが、とても良いことばかりだったように思います。勤務日は週に一回程度でした。これを少なく感じる方もいらっしゃると思いますが、本科は四年生から忙しくなるため、これくらいの頻度がちょうど良いと思います。また、同学年の人たちとの六人の当番制なので、シフトについても幾分か融通が利かせ易いかと思います。

さらに、勤務中でも時間の空いているときには、本を読んだり、勉強したりすることができます。時間を余すことなく使えるので大きなメリットだと思います。

私が一番良かったと思えることは、勤務時間が放課後だということです。授業が終了した後続けて勤務するわけですから、わざわざアルバイト先に出向くのが面倒だと感じている方にはうってつけかと思います。さらに、本が好きだともう何も言うことはありません。本に囲まれて仕事ができるのは、この機会を逃したら一生無いかもしれません。そうでなくても、計算ばかりの授業の後では気分転換にもなります。とにかく、学生図書職員は良いことづくめですので、興味のある三年生の方は是非応募してみてください。

最後になりましたが、お世話になった皆様、本当にありがとうございました。

## 1年を振り返って

情報工学科4年

郡司 美玖

私は本を読むことが好きで、以前は特にミステリーに傾倒していた。しかし、高専に入ってから相変わらずミステリーは読むものの図書館の職員の方がおすすめてくれる本はどれもおもしろくて、ジャンルを問わず読むようになった。

4年生になり、学生職員になった。ちょうど図書館が改装され、新しくなった。17時からの勤務は8限などでギリギリになることもあったが職員のかたのフォローがあり、助けられた。

また、交代の連絡に不手際があり勤務に遅刻しそうなことがあった。これから、事前の相互連絡が大切なことを学んだ。このことを教訓に様々な面で生かしている。

何より、学生職員になったことでクラスの人の意見や自分の意見を報告でき、それを反映してもらってより良い図書館づくりに参加できたことが一番の収穫である。市や県の図書館ではやはり、個人個人の本に対する要望や意見はあまり通らないことが多いので高専の図書館の存在は非常にありがたい。また、文学書がとても充実しているので偏った利用層にならないことも良いと思う。

働く、ということを通してわずかな期間ではあったが体験できたことは、私にとってとても良い経験になった、勉強とは違う面で成長できたと思う。

## 学生図書職員を振り返って

情報工学科4年

高山 夏実

私は本を読む事が好きです。よく図書室を利用していました。図書室には参考書や専門書、小説など幅広いジャンルが揃っています。読みたい本が無いときは希望を出したり、また時々行われるブックハンティングで自分の好きな本を選んだりする事が出来ます。ブックハンティングの後に図書室に向かって、新しく入った本を見るのが楽しみでした。学生

図書職員になってからはさらに早く、新しく入った本を見る事が出来ました。そして勤務の時間は新しい本を読んだり勉強をしたりしていました。

図書室を利用する人は様々でした。読書をして過ごす人、卒研の為に専門書を借りる人、試験勉強する人等です。また、時々一般の人が本を借りに来ました。改修工事を終えた図書室は、新しく出来たグループ学習室等学生が利用しやすいように様々な工夫がされていました。とても過ごしやすい環境になっていると思います。図書室を利用する人は皆ゆっくりと、思い思いの時間を過ごしていたように思います。

業務内容は本の貸し出しや返却が主ですが、購入した本の中に既存の本が無いか検索してチェックしたり、本に番号のシールを貼ったりと、職員の人に

頼まれる事もありました。こうした業務を通して、自分が今まで知らなかった本に出会えたり、利用しているときには気付かなかった事を発見したり等、新たに知る事が多く面白かったです。業務をこなすうちに、本のある場所に少し詳しくなる事が出来ました。

寮生である私にとって、学生図書職員は本に触れる機会が増え、また通いやすくもありとても有意義なものでした。この原稿を書いている現在次の学生図書委員を募集しており、期間があともう少しで終わる事を実感し少し淋しく思います。もう学生図書職員として働く事は無くなってしまふけど、これからも図書室に通い続けていきたいです。そして新しく学生図書職員になる人達にとっても私が感じたように有意義なものだと感じてほしいです。



# 第34回 校内読書感想文コンクール!

本年度の校内読書感想文コンクールを行い、下記の作品が入賞となりました。  
来年度も校内コンクールを実施予定です。たくさんの応募をお待ちしております。



## 選考結果及び作品紹介

区 分	作 品 名	学年組	氏 名
最 優 秀	『銀河鉄道の夜』	2年1組	松 野 滉 平
優 秀	『あしたの私の作り方』を読んで	2年3組	樋 口 佳 奈
佳 作	『アルジャーノンに花束を』を読んで	1年1組	濱 崎 健
佳 作	『県庁おもてなし課』を読んで	1年1組	古 川 満理奈
佳 作	『兎の眼』を読んで	1年2組	西 村 一 心
佳 作	うそにまみれた社会	1年2組	野 中 柁 暉
佳 作	『終末のフール』を読んで	1年3組	久 富 未 結
佳 作	『私の友達』	2年1組	工 貴 大
佳 作	『絶望の隣は希望です!』	2年2組	緒 方 洋
佳 作	『夜は短し歩けよ乙女』を読んで	2年2組	原 田 真之介
佳 作	『ガールズ・ブルー』	2年3組	上 妻 な お
佳 作	『変身』	2年3組	松 村 奈 実



## 『銀河鉄道の夜』

2年1組 松野 滉平

「ほんとうのさいわい」とはいったい何なのか。私はこの本を読んで、その事を考えた。この本を通して何回も出てくる「ほんとうのさいわい」という言葉。ジョバンニの、カムパネルラたちとの銀河鉄道の旅は、この言葉の答えを探す旅だったと思う。ジョバンニは途中、鳥捕りのために、ジョバンニの持っている物でも食べるものでもなんでもやっつけてしまいたい、この人のほんとうのさいわいになるのならなんでもしてあげたいという、自分のためではなく、人のために生きるということを考えた。そして、女の子から蠍の話を聞いて、その蠍のように、自分の命なんかどうなってもいいから、他人のほんとうのさいわいの為に生きていくと誓った。

2011年3月11日、東日本大震災が起こった。それから一年の時が過ぎた。復興の作業などは着々と進んでいるものの、まだまだ元通りには程遠い。

2011年の今年の漢字は「絆」であった。この漢字に決まった理由も、やはり震災の事が大きかったと思う。しかし、実際には、例えば震災がれきを受け付けられないということがあり、絆がどうのなどと言っても、自分にふりかかる嫌なことは一切受け付けられないという、上っ面だけの絆になっていると思う。

ジョバンニのように、他人のほんとうのさいわいのためになら自分はどうなってもいいという考えの人はいないのか、とってしまう。確かに、他人のために生きていくことは、簡単なことではないと思う。私も以前は、自分さえよければ、あとは二の次という考え方であった。しかし、この本と出会って、自分のためだけに生きていくという考え方は、あまり良いものではない、清々しいものではないと思うようになった。そして、何より転機になったのは、母に、ある説教をされたときである。私はよく母と口論になると、母を馬鹿にするような態度を取ったり、適当に話を聞いたりしていた。そして説教が終わった後、何気なく自室で母の事を考えた。隣の母がいる部屋からは、今日は24時間で一睡もしていな

い。と、ぼやいているのが聞こえた。深夜はアルバイト、朝から夕方までは妹の部活の送迎や家事で眠れなかった、と。その言葉を聞いて、母こそが、本当に他人のさいわいのために、ぼくたち家族のさいわいのために自分の睡眠時間さえも犠牲にして必死に生きていることに気づいた。私の目からしばらく涙が止まらなかった。そして、私も、その日から、ジョバンニのように、母のように、自分のことを犠牲にしてでも他人のほんとうのさいわいのために生きていくことを誓った。

ここまで、ほんとうのさいわいとはいったい何なのかということには触れなかったが、私は、ほんとうのさいわいとは、生きることそのものだと思う。カムパネルラは、川に落ちてしまったザネリを救うために、自らの命を犠牲にして川へ飛び込んだ。結果ザネリは無事に救助されたが、カムパネルラはそのまま死んでしまった。ジョバンニとカムパネルラは銀河鉄道の旅で、共にみんなのほんとうのさいわいのために生きていこうと誓った。カムパネルラのこの行為は、みんなのほんとうのさいわいのため、ここではザネリのほんとうのさいわいのためにとったのだと思う。確かに、ザネリは、ジョバンニのことをからかう人物たちの中心でもあったので、あまり好ましくなかったのかもしれない。しかし、それでもザネリが死んでしまうかもしれない時は、自分の命など顧みずに、ザネリを救った。他人のほんとうのさいわいのためなら、自分の命さえ惜しくない。銀河鉄道の旅によってその答えを得たカムパネルラだからこそとれた行為だと思う。

ジョバンニとカムパネルラは2人とも、ほんとうのさいわいとはなんだったのかという答えはわからずじまいだったが、それでもカムパネルラはこの行為をとり、そしてジョバンニはカムパネルラの死により、ほんとうのさいわいの答えを見つけたのだと思う。だから、ジョバンニは、最後に、自分の母の為に牛乳を持って行って、お父さんが帰ってくることを教えようと走ったのだと思う。

作者は、結局ほんとうのさいわいとはいったい何なのかという答えは最後まで明かさずにこの世を去っている。これには作者が、この答えを読者に考えてもらうために、読者にもジョバンニのように他人のほんとうのさいわいのために生きて、その人生の中でほんとうのさいわいとはなんなのかという問

いの答えを見つけてほしいという思いがこめられていると思う。

東日本大震災から1年経ったが、まだまだ完全に復興するには遠い。この復興が実現されるためには、日本の、世界の人々がジョバンニのように他人のほんとうのさいわいのために生きていかなければならないと思う。



「本当の私」は他にある。小学校高学年になった時から中学校を卒業するまで、毎日強く思っていた。みんなの知っている「私」は私じゃない。

小学校四年生になったある日、私の毎日は大きく変化した。クラスにいじめが起こったのだ。私は自分がいじめられるのがすごく怖かった。みんなに意見を合わせ、敏感に周りの顔色を窺った。それでも自分の順番はやってきた。目立つことが嫌いになり、好きなものを好きと言えず、思っていることを話せなかった。人間が怖いと知ったのだ。中学生になってもそれは変わらなかった。いじめられる事はなくなっても、人に嫌われる事を酷く怖がって、自分を演じていた。そのくせ「本当の自分」は他にあってそれを他人に見つけて欲しくて、それなのに触れてほしくないとも思っていたのだ。

寿梨も私と同じような葛藤の毎日の中で生きていた女の子だった。「みんなと仲良しの寿梨」「先生の前でいい子な寿梨」「ママの事が大好きな寿梨」。家族、そして友達に嫌われないため、上手く過ごすために身に付けた处世術。彼女も15年間、自分を偽って、そして自分を守るために、自分自身を演じ続けて生きてきたのだ。

「人間は怖い。」たった1行読んだだけでこの本に強く引き付けられた。それはきっと今までの私と彼女が酷くそっくりだったからだ。1行1行読み進めていくごとに寿梨の姿は私と重なった。そして彼女が自分自身の葛藤の中でどうやって生きていくのかわりたくなくなった。と言うのは建て前で、本当は答え

が知りたかったのだ。私はどうすればいいのか。「本当の私」とはいったい何であるのか。

小さい頃、誰もが大人に言われたことがあるだろう。「嘘をついてはいけない」と。毎日を演じている私、そして寿梨は嘘つきだ。寿梨は田村先生に言われた。「嘘には2種類ある。自分のためにつく嘘と誰かのためにつく嘘。誰かのためにつく嘘は時には美しい。」と。私はいったい誰の為に自分を演じているのだろうと思った。それは紛れもなく自分自身の為だった。この言葉は私にはとてもショックだった。自分の為に嘘をついている私は、自分がとても小さい人間のように思えたのだ。寿梨はこの言葉に何を思ったのだろう。私のように自分を非難したのだろうか。考える間もなく先生の話聞いていたのだろうか。先生は続けて言った。「小説は、いってみればその羅列に過ぎないのに、文字だけで読んでいる人間の心を動かす。」

彼女が答えを見つけるのは高校生になった時。ふといじめられていた小学校の同級生、日南子にメールを送る。「ヒナとコトりの物語」届いたメールを読んだ日南子は物語の中のヒナを演じ人気者になっていく。しかし物語が終わると彼女達は現実に戻らなくてはいけない。そして気づく。物語が終わったとき何を演じていけばいいのか。物語が終わって寿梨は日南子と再会する。そして、日南子は言う「ここにいる私が私」なのだと。

この時の日南子の言葉すべてが私の心にスッと染み込んでいった。「本当の私」は他にあるとずっと長い間思っていた。けれども「本当の私」は何処にいたのだろうとも同時に思っていた。明るくてみんなと仲良しで何でもできる。それが「本当の私」なら「嘘の私」は何なのだろう。けれど答えは簡単だった。どちらの私も私。それだけなのだ。醜くて、嘘つきで、臆病で、全然イケてない。そんな格好悪いのも含めて私なのだ。演じている私も私と認めていいのだと。寿梨に向けられた日南子の言葉は私に向けられているようで、胸が締め付けられ、涙がこぼれた。

最後の1行を読み終えた時、私の心はとても晴れやかだった。日南子が答えを見つけたように、寿梨が日南子から言われて私は私なのだと思えたように。嘘の羅列に過ぎないかもしれない寿梨と日南子の物語は私の心を動かし大切な事を教えてくれた。

きっと誰もが自分を演じて生きている。それは意識していたり、無意識のうちにやっていることだったりするだろう。けれど、そんな自分も私なのだ。かっこ悪くて醜い嘘の私も本当の私も私自身に変わりない。それはすごく簡単な答えだった。今、私はこれが私だと、自分自身だと堂々と言える。学校で友達と過ごしている時も、家で家族と過ごしている時も、どれも私。私自身だ。

「まだちょっと怖いけど、でも自分なりにまずは生きてみようと思う。今日嫌なことがあっても、明日はいいことがあるかもしれないから。」



私はこの物語を読んで、幸せについて考えさせられた。そして、主人公チャーリーの変貌を通して、「本当の幸せ」とは何なのかを改めて考え直す良い機会となった。この物語はそんな、今まで私が考えたことのない、しかしとても大切なことを教えてくれた物語である。

この物語の主人公、チャーリー・ゴードンは、32歳になっても幼児並みの知能しかない精神遅滞者だ。あるとき、そんな彼のもとに「手術をするだけで天才になることができる」という夢のような話が舞い込んで来る。彼は、もちろんとても喜び、その話にとびついた。そして、見事に手術によって天才へと変貌を遂げる。

ここまで読み進めたとき、私は頭の良くなったチャーリーはきっと幸せになれるのだろうと思った。なぜならば、彼は子供のころからずっと、純粋に賢くなることを心から望んでいたからだ。しかし、どんどん読み進めていくうちに実際はそうではないということが分かった。

手術を受ける以前のチャーリーはとても素直で明るく、純粋な青年だった。まるで子供のように振る舞って、何も知らずに周りの人たちと一緒に自分のことを笑っていた。みんながなぜ笑っているのかは分からなかったが、ただみんなが自分の周りで笑っ

てくれているのは、自分のことを好きでいてくれるからだと思っていたからだ。そして何より、みんなの笑顔を見ているのが好きだったからだ。チャーリーは、周りのみんなを信用し、みんなも自分のことを信用してくれていると思っていた。しかし、そんなチャーリーが、手術を受けて賢くなったことによって、まるで別人のように変わってしまう。みんなが笑っていたのは、自分のことを馬鹿にしていたからだと思いつき、ついには誰のことも信用できなくなってしまった。そのことによって、彼の周りの人たちはみんな態度を変えて、次々と彼のもとから離れていってしまう。そして、純粋だったチャーリーの心は、本当のことを知ってしまったことで次第に冷たくなっていった。

このように、手術を受けて賢くなり、今まで知らなかったことを知ったことで、誰も信用できなくなって、信用していた友達までも失ってしまった。

私は、この物語の中でチャーリーを偏見の目で見たり、馬鹿にしたりしている人たちに対して、激しい憤りを感じるとともに、なんだかとても恥ずかしくなった。それは、自分もこの人たちと大して変わらないようなことをしていたのではないかと気付いたからだ。何かにつけて、心の中で自分と他人とを比較し、自分より少しでも劣っている人を見下して満足している醜い心があった。このように読み進めていくにつれて、今までの自分を反省することができた。これまで私は、知能についてあまり深く考えてみたことがなかった。自分が周りの人と同じ様に生活することができていて、不自由なく生きていけるだけの知能がある。それが当然のことだと思っていたからだ。そして、知らないうちに、自分のような健常者は幸せで、チャーリーのような精神遅滞者は不幸だと思い込んでいた。今、自分で考えると、ただの偏見であって、とてもおかしいことだ。また、本当の幸せはそんなことではなく、もっと大切なことだと思う。

では、人間にとって、本当に大切なものは何なのか。私はその答えを、物語の中でチャーリーが言った、「人間的な愛情の裏打ちのない知能や教育なんて何の価値もない」という言葉の中に見つけた。大切なのは知能ではなく心なのだ。どんなに賢くて勉強ができたとしても、人を信じる心がなければ、機械と何ら変わらない人間になってしまうのではないか。

私が思う「本当の幸せ」とは、いつも信じあえる人と一緒に笑っていただけることだ。何よりも笑顔が一番だと思う。助け合い、信じ合える家族や友人とともに、当たり前の日常を楽しく笑顔で過ごすことができれば、本当に幸せだ。ただ、周りの人の笑顔を見られる。それだけで私は「幸せ」だと思う。そうあるために、高い知能や技術などは不要である。本当に必要なのは心なのだ。

私はこの物語を読んで、考えさせられることがたくさんあった。また、今までの自分を振り返り、反省することもできた。だから、この本に教えてもらったことを生かしていきたい。「心」を大切に、「本当の幸せ」を味わうことのできる人間になりたい。



私はこの作文を書くにあたって、県庁おもてなし課を2回読んでみた。1回目は純粹に物語として楽しみ、2回目は自分ならどうするかを考えながら読んだ。

この物語の前半では「人による時間やものとのとらえ方の違い」がよく出ている。この「時間」について考えてみる。

現代、私たちは時計を持っており、1時間1分1秒は誰に対しても同じだ。しかし「ちょっと」という時間が5分なのか10分なのかを特定することは難しい。人と場合によって変わるからだ。同様に「1時間」という時間が長いのか短いのかも人と場合によって変わる。遊園地で遊ぶ1時間と、ただ座っているだけの1時間では全然違う。

県庁おもてなし課では34日という時間の見方の違いについて語っていたが、私の身近にも似たようなことがないか考えてみた。すると、中学校に入学して2ヶ月ほどたったときのことを思い出した。

私は菊池市の割と中心部に住んでいて、通っていた小学校までの距離は700メートルとなかった。一番遠い友達の家でも2キロメートルもはなれていな

かった。私はそれが当たり前だと思い、過ごしてきた。中学校に上がり、別の小学校から来た人たちにたくさん会った。その中で仲良くなった女の子に聞いてみると、彼女の家は通う小学校から15キロメートル以上はなれた所にあり、近い友達の家でも3キロメートルほどはなれた所にあるらしい。こんな人もいるのかとその時は驚いたが、それは彼女も同じだったらしい。ためしに彼女に「ちょっと遠いってどのくらいなの？」と聞いてみると、彼女は当然のように「7、8キロくらいかな。」と答えた。これにはとてもびっくりした。そのころの私の中で「ちょっと遠い」といえば、1キロメートルくらいだったからだ。つまり、住んでいる所が違うだけで「ちょっと遠い」の見方が大きく変わっていたのだ。

また、この物語には「相手の目線に実際に立って物事を見てみる」ことが大切だ、ということも何度も書かれている。次はこの「実際にやる」ということについて考えてみる。

物事を考えることは大切だが、やはり自分の足で出向き、自分の目で確認することがより大切だと思う。机に座っていくら考えても所詮、机上の空論なのだ。マラソンのコースを考えるとしよう。パソコンで航空地図を出したり、距離や交通量の資料を集める。それらを基にコースを考える。コースはこれで完成だ。しかし、実際にマラソンコースを作る人はそのコース通りに歩いてみたりする。データにはないことが起きていたりするからだ。突然の事故で木が倒れていたり、トラックの通行量が多かったり、急な工事が行われている可能性だって否定できない。コースに自分で出向かなければこれらのことは分からない。刑事や探偵だって同じだ。資料や情報は他の人が集めて、それを受けとっただけで解決できる事件なんてそうそうない。大抵は自らも現場に行く。関係者に話を聞く。そうすることで考えが生まれ、事件解決へとつながるのだ。それこそ「事件は会議室で起きてるんじゃない。現場で起きてるんだ！」の名ゼリフのように。よってどんな事でも、実際に見聞きした方がより理解できると私は思う。

さて、ここまで私は「人や状況による時間のとらえ方の違い」や「実際にやってみることの大切さ」を語ってきた。結局、何が言いたかったのかというと、他人は自分とものとのとらえ方が違うし、考えていることと実際のことは違うので、世の中思い通り



にいくわけがない、と言いたかったのだ。当然といえば当然だが、それを忘れてしまっている人をたまに見かける。主に、筋違いに腹を立てている友達や同級生なのだが、見ていて気持ちのいいものではない。むしろ見てるこちらがイライラしてくるぐらいだ。でも、私がおの人たちのそういう姿を見ているということは、その人たちは私のそういう姿を見ているのかもしれない。相手に不快感を与えないためにも、私は「自分と相手の思っていることは同じではない」ということを心に留めておこうと思う。これが私の、県庁おもてなし課を読んだ感想だ。

最後に、個人的な好みのお話になるが、有川浩さんの書いた小説はおもしろいと思う。その話に出てくる事柄を詳しい所まで調べて書いてあるので、いろんな方面の知識を手に入れることもできる。難しい言葉を使ってあるわけではないし、人によって様々な解釈ができるので、大人から子どもまで楽しめる作品が多い。特に、図書館戦争シリーズはおすすめだ。時間があるなら、ぜひ読んでほしい。



「ハエを飼うなんて汚いし、気持ち悪いし、おかしいんじゃないか。自分だったら絶対ハエは飼わないな。」

この本の読み始め、私はそう思った。

しかし、読み進めるうちにその考えが少し変わった。

この本には、臼井鉄三という小学1年生の少年が出てくるのだが、その子がハエを飼い、かわいがっているのだ。それも、私たちがペットの犬や猫をかわいがるように。

私ははじめ、

「なんでいろいろな生き物がいるのに、よりによって人に嫌われるハエなんだ。」

と思った。

しかし、ちゃんと理由があったのだ。

鉄三はバクじいさんというおじいさんと、ゴミを処理する場所に住んでいる。バクじいさんは、鉄三

の担任の先生に鉄三がハエを飼う理由を聞かれ、こう答える。

「鉄三が悪いわけやない。山に連れて行ってやれば鉄三は虫を飼うと思います。川へ連れて行ってやれば魚を飼うと思います。ここはセンチ虫とゴミ虫とせいぜいハエぐらいしかおらんとこや。鉄三がハエを飼うのはあたりまえといえはあたりまえの話や。」

私はこの場面を読んで、昔よく山や川に、虫や魚を獲りに行ったことを思い出した。私の近くはそのような環境だったが、もし鉄三のような環境で育てたらどうなっていたらと思う。本当のことは、なってみないと分からないが、可能性は十分あったらと思う。だから、鉄三やハエを飼うことを馬鹿にしてはいけないと思った。そして、鉄三がハエを飼う事があたりまえだったように、人にはいろいろあたりまえがあると思った。でも、それが正しいとは限らないし、押し付けることはいけないことだと思った。

私は、他人のあたりまえでよく思うことがある。他の人が知っていて、自分が知らなかったりすることがあるのだが、そういった時、

「そんなのも知らんと。」

という風に言われたりする。私はこれを言われると、自分がおかしく、恥ずかしく感じたりする。

しかし、よく考えれば、逆になんで、知っていなければいけないのだらうと思う。今まで誰がどう生きて何と出会って、何に夢中になって、どんな情報を入れるかとか、そういうことは人それぞれ違うことが当然だと思うからだ。そして、相手が知っていることを知らないことも当たり前だと思う。逆に自分が知っていることを相手が知らなくて当たり前なので、自分も自分がされたようにはしてはいけないと思った。

こういったことのほかにも、この本を読んでいて考える場面があった。それは、ハエの生きざまについて説明する場面だ。

その説明というのが、

「ハエは、親に産み放され、生涯を仲間も家族も家さえなく、ひとりで暮らす。その間ハチ、クモ、小鳥などにおどかさるが、他をおどかすことはなく、その食べる物といえは社会の廃棄物にすぎない。そこにはなんの美談もないが、残忍性もなく、ごく

つつましい、いわば庶民の生活である」というものだ。私はこれを読んで、自分を恥ずかしく思った。なぜならハエを汚いと嫌い、自分たちのほうが高等な生き物だと思いつけているからだ。そして、ハエは確かに、いたら気持ち悪いが、害はあまり加えない。それに比べ、人は自然を破壊し生き物たちの命のありかを奪うし、全てが当てはまるわけではないが、人だからこそその醜さがあるからだ。私は人よりもハエのほうが綺麗だと思った。しかし、それでもハエになりたいとは思わない。いくら人間が汚い生き物でも、それでも私は、人間という生き物に執着してしまう。それは、醜さとかを知っているながらも、人間として生きる喜びとか、幸せとかを知ってしまったからだと思う。人との関わりはややこしくて、面倒くさくて、大変なことがあるけど、そればかりじゃないことを知っているからだと思う。だから、人間として生きるいじょう、自然を守るための努力をしないといけないと思った。

そして、もう1つ、この本を読んで考えることがあった場面があった。それは、鉄三のクラスに、伊藤みなこちゃんという女の子が入ってきたときの話だ。伊藤みなこちゃんは病気を抱えていて、自分でトイレに行って用をたすことが苦手だ。それで、授業中におもらしをし、授業を中断させたりする。そんなみなこちゃんを、授業の邪魔になるという理由で、学校に来ることを反対する親もいた。みなこちゃんは病気で勉強などを教えても理解することができないから、『もどかしなくていい』という考えもあった。しかし、それでもクラスと先生は、養護学校に行くまでの間、寄り添ったのだ。

私はこの場面で、『できないならやっても無駄だからしないほうがいい』という考えは、間違いだと思えることができた。

私は兎の眼を読んで、あたりまえとか、いろんなことを考えさせられ、学ぶことができたと思う。だから、学んだことやこれまで生きてきた中で培った価値観などを、これからまたいろんなことにふれていく中で、育てていきたいと思った。



「でも大丈夫だよ。僕がここにいるから。」  
このような言葉を使う人がとなりにいたら、あなたはだまされている。私はそう思う。この言葉を使う人がどんなに大切な人であれ、実際にそのとおりになるだろうか？

私は、「大丈夫」というところに疑問を抱いた。何が「大丈夫」なのであろうか。「幸せになる」、「安心できる」など気持ちのことを指すのであろうか。それはおかしいことではないだろうか。たった1人の人間がいるだけで幸せになることなどありえない。それに、人間の命には、限りがあるはずだ。誰がいつ死ぬのかということも分からない。そんなことでは、いつ「ここ」からいなくなるかも分からない。つまり、たとえ大丈夫だったとしても、先に死んでしまったら、意味がないということになる。

私は、もしこのような言葉を使うことがあるとすれば、恋人どうしなんかが一番多いのではないかと考える。恋人ということは相手がいる。その相手がいってくれるなら、私は大丈夫だという人の気持ちも分からないことはない。だが本当に「大丈夫」なのであろうか。「ここ」にいるだけで、本当に「大丈夫」なのであろうか。1つ例を挙げてみよう。例えば、ある女性に対して、この言葉が言われたとしよう。そしてその女性がもし、誰かに襲われるようなことがあったとしよう。言った人がどんなに強い相手だったとしても、集団で襲ってきた場合は、さすがに厳しいだろう。これは、「もし」の話であるため、このようなことが絶対起こるとは限らないが、何かしら「大丈夫」と言いきれない状況になるはずだ。このように、「大丈夫」ということはなく、言った人はうそつきだったということになる。だが、悪いのはその人だけではないと思う。その言葉を信じた人にもきっと問題があったはずだ。なぜもっとその言葉を、人を疑わなかったのかと。

ところで、「信じる」とはどういうことだろうか。辞典で調べてみると、「疑わないこと」とあった。

では、疑わない人なんているのだろうか。そんな人はいないはずである。私も人を疑い、よく相手の裏がないか気になってしかたがないものである。まわりの人達も、疑ったことはあるはずだ。そうになると、心の底から信じられる人はいないということになる。では、なぜこの社会、世界は成り立っているのか。世界中のすべての人が、「人とは、信じられない。だから、だれも信じるべきではない」ということを理解して、行動していれば、一人一人が孤独のはずだ。そして、協力するなんてことがなく、人類は滅亡していることだろう。だがそのようなことがなく、今がある。今があるということは、一人一人の意識が甘く、一人ではどうすることもできないほど力がないということではないだろうか。

ところで、「力がない」と書いたが、では何の力や能力があればいいのであろうか。当初私は、何でもきちんと知ってしていること、つまり「知ること」だと思っていた。何も知らないとどうしていいのかわからずに、自分から間違っただ道に進んでしまうことも少なくはない。また、何も知らないと何かがあるかわからずに怖くて先に進めなかったりする。進めたとしても、何かがあるのかわからない。

知らないということは生きることもできなくなる。生きていくうえで、たくさんのことを経験し知ることが必要になる。それを知らないということは、生きていけるはずがない。そのように考えると、その時はどうしてもいろいろなことを知ろうとした。だが、すぐに、何かに生かされるはずもなく、どうしようかと迷っている日々が続いた。その時、やっぱり「知ること」だけでは、どうすることもできないことを知った。全て知っていたところで、その人にはどうしようもできないことだってあるはずだ。このように、一人ではどうすることもできないことがあたり前のことであり、別におかしいことではなかったのだ。思えば、私自身も、いろいろな人と支え合って生きている。自分ではどうすることも出来ないことが多くなり、とても多く友達に助けられた。まわりの人間というものは、どんなにうそをついても、人をだますようなことをする可能性がある人であっても、切り離すことなどできないということだ。なんか、良いことでも、悪いことでもありそうな感じがして、あまり良い気持ちはしない。だが、その中で、気をゆるめすぎずに、日々学んでいくためだと

思い、過ごしてみようではないか。

今、私達に一番大切な力、能力というものは分からないが、それでも今を歩き続ける。その何かを見つけるために。



「今日という日は残された日々の最初の一日。」

この本はこの言葉から始まった。まだ人生のうちの半分も生きていないであろう私からすると、深い言葉なのだろうと思うことしかできなかった。ただこの、何気なく手にとった「終末のフル」を読み終えた今、現実味を帯びなかったこの言葉も、私の心、考え方に多大な影響をあたえた。

余命八年。そう告げられたら、私は何をしよう。しかも、「私の」余命ではなく、「地球の」余命だ。きっとこの本のように、治安が悪くなっているであろう世界に流されず、生きてゆけるのだろうか。この平穏な日常を守り続けることは可能なのか。悩み、考え、狂う中にも刻々と死へのカウントダウンは始まっているのだ。その事実は変えられない。そんな時「ヒルズタウン」の住人たちも、個々の生活を送っていた。

間違っただ考えと、言動で、長男を亡くしてしまった家族がいた。バラバラだった家族もこの出来事でもう一度集まる。そして、すべては許せないが、和解する。「余命」を精一杯、彼を思い生きていくと。

余命が3年となった頃、授かった小さな命があった。ただ、2人は悩む。生まれたとしても、この子の命は3年なのだと。しかし、2人は心に決めた。「余命」をこえて生きる事を信じるのだと。

それぞれが「余命」に悩み、戦っていた。私は、きっとこの重圧に耐えきれなくなる。今の私の家族と共に、大切な人たちと共に日々を刻むことは難しいかもしれない。「死」を選んでしまった住民や、罪をおかしてしまった住民。彼らのように、間違っただ方向へ進んでしまうかもしれない。「生」と「死」との狭間で、いざとなったらどんなことを考えてし

まうのか本当は分からない。しかしそれは、今の日常でも変わらないことであるのだ。私たちは限られた時間の中、「生」と「死」の狭間で生きている。それが8年であろうと何十年であろうと違いはないのだ。

ならば今、限られた時間の中生きる私にとっての幸福とは何か、考えてみた。彼らの幸福は、形はそれぞれ違うものの、「信じる」ことであった。決して、形ある物ではなかったのだ。確かに、形ある財がたくさんあれば幸福かもしれない。欲があるのが人間であるのだから。ただそれは、今の幸福にまひしているにしか過ぎないのではないかと思う。平穏な日々突然訪れた出来事によって、それはより一層感じることができる。この「ヒルズタウン」の住民たちも感じたはずだ。これまでの日常が、どれだけ幸福なことであったのかを。家族が集まる、新しい生命が宿る、出会いを見つける。この世界の中で今も必ず起きているであろう事こそが、最後に欲する、彼らの求めた幸福であった。私の幸福、それはきっと、彼らと同じようにいつもの日常ではないのか。ただ話し、笑って少し悩むような、そんな日々が、とても大切に幸福なのだと思う。毎日毎日実感があるのかと言われると少し戸惑うところもあるが、感じることも多々ある。例えば、中学校を卒業して新しい道へ踏み出した私。その日を最後に別れたクラスメイトと急に集まれなくなった途端、今までの仲良く過ごしていた生活はこんなにもかけがえなく愛しいものだと感じた。幸福だったのだと感じた。また、自分の日常の話をする、幸せな気持ちが心をうめつくす。そんな気持ちが、私に幸福を感じさせ、日常がどれだけ幸福か考えさせてくれた。しかし、その気持ちがどんどん薄れていくと、本を読む前の私のように、冒頭の言葉の意味すら、深く考えることができなくなってしまう。

もし、私が幸福を望むのなら、前は財をたくさん得ることだったかもしれない。しかし、この本を読み終えた後は、日常を幸福だととらえることができた。どんな物にも代えがたい幸福なのだと。その機会をこの本は、冒頭の言葉は、あたえてくれた。

「今日という日は残された日々の最初の日」

この言葉は、「人生は限りがある」、「限りある中で、毎日毎日が最初のスタートである」という意味が含まれているのだと思う。生活の中で、一日一日

を大切にしなければならないと強く感じた。その一日一日の平穏が幸せであると思った。この言葉を残したアメリカの薬物中毒患者救済機関の設立者であるチャールズ・ディードリッヒはきっと、日常がどれだけ幸福なもので、限りあるものであるかを感じ、考えて、この言葉を残したのだろう。彼のように私も、日常の幸福を感じ、限りある時間の中で日々新しい一歩をふみ出したい。この本に出会い、私の心、体までも日常の幸福を感じ考えることができた。



私がこの作品を読むのは今回で2回目だが、この作品を読み終わった後は、1回目と同様に「友達」とは何かということが頭に浮かんだ。この作品の中でメインとなっている人物、恵美が思っている「友達」がどういったものなのかがとても気になる。

この小説は足を怪我して以来、「みんな」と距離ができてしまった恵美とその周りの人々との話である。恵美の弟ブン、ブンの親友のモト、恵美の親友の由香ちゃん、少しでも恵美の友達だった堀田ちゃん、西村さん、ハナちゃん、そして恵美とちょっと接したブンの先輩の佐藤さん、幼なじみの三好くん。これらの登場人物は、みんな友達だったり、誰かしらの「人」とのつきあい方で悩んでいた。そんな中で恵美との関わりを通じてちょっとヒントをもらう。そういう話だ。

この作品では共感できる部分が多くあったが、中でも私は、モト視点でブンとモトの話が描かれている「かげふみ」のモトの姿と中学生のときの自分の姿が似ているようで強い共感を持った。中学生の時、私にもライバルのような親友のようなそんな感じの友達がいた。幼稚園の時から仲が良くて小学校は別々だったが、中学校でまた同じになった。性格も良くて勉強、運動とも優秀な彼は僕にとって凄いやつであったし、そんな彼に少しでも追いつこうとしていた。中学校に入ってから1回目のテストでは私が勝っていた。しかし、私は中学生の時は順位な

どを恥ずかしがって人には言わず、人の聞いても適当に流していた。だが彼は、テストが返ってくるとすぐに私に順位を聞いてきて、私が勝っていることを知ると露骨に悔しがっていた。彼との中学校における勝負はもうこの時点でついていたんだと思う。3年生になると、私よりランクの高い高校を志望した彼との差はどんどん開き、もう追いつけなくなっていた。

この小説に出てくるブンとモトの関係とは少し違うが、モトのブンにどんどん置いて行かれているような気持ちはよくわかる。何の関係もない話したこともない人にだったら、テストや運動で負けても特に悔しさなどの感情は湧いてこない。しかし、相手のことを知っていて、相手も自分のことを知っている。そして挑戦してくる。ブンとモトはそういう関係にあるからこそ、モトも悔しさがあるのだと思う。モトの心の中の台詞にこんなものがある。「負けて悔いのない相手で、こいつになら負けてもいいか、と思える相手—だからこそ誰よりも負けたくなかった。」私の気持ちもこれと似たようなものだった。もっとも私の方は2年生の後半ぐらいまでおっとりしていて、あまり悔しいとかそういった感情を持っていなかった。もっと負けず嫌いであったならきつともっと成績も上がっていただろうと今頃になって思っている。

そして、この話の中でのブンとモトの関係は、恐らく「ライバル」だとか「親友」といった関係だと思うのだが、ブンがモトのことを親友と言っていたことを聞くとモトは怒っていた。そして怒っているモトに対してブンの姉である恵美は怒って正解だと言う。私はこの場面でモトが怒っているのは、自分とブンの関係を「親友」だとか「ライバル」といった簡単な言葉でかたづけられなくなかったからではないかと考える。親友でもありライバルでもあるのだが、2人の関係はそんなに簡単なものではないし、ブンはブンで自分は自分だし……、とモトは考えているのではないか。自分たちみたいな関係をなんと言えばいいのか？というモトの問いかけに対して、恵美は「自分で考えるしかないんじゃない？」と答える。以前、ブンが恵美と由香のことを「親友」と言ったとき、恵美は本気で怒っていた。やはりこの時も恵美は由香との関係を他者から勝手に決めつけられなくなかったのだと思う。自分たちの関係は自

分たちだけの関係であって、それがどんなものであるかは自分でゆっくり考えていかなくてはならないと思っているのだろう。

最初の話に戻ると、やはりこのモトに対する恵美の言葉から窺える「友達」という言葉に対する恵美の考えは、『クラスメイトだから、仲がいいからというだけで「友達」になるのは違う』ということだと思う。単に「友達」という言葉ではかたづけられない仲だってあるし、一人ひとり誰かとの付き合いを「友達」ではなく、自分で考えて答えを探していかなければならない。

この小説を読んで、クラスの人や先輩、後輩、家族などとの関係をもう一度しっかり見直して、自分たちだけの「友達」というものを大切にしていこうという気持ちになった。



この本の作者であるやなせたかしさんと言えば、誰でも幼少時に夢中になって見たアニメ「アンパンマン」の生みの親として知っているだろう。私がこの本を読もうと思ったきっかけもそれである。幼少時によく見ていた「アンパンマン」は、どのような思いで創られたのか。また、私が「アンパンマン」の中で特に印象深い行為である、自分の顔であるパンをお腹をすかせた子どもたちに配るのは、やなせさんのどのような意図によるものなのか知りたかったからである。

やなせさんは、最初に今回の大震災で大きな被害を受けた陸前高田市について書かれている。陸前高田市にある「高田松原」は約2キロメートルにわたる弓なりの白い砂浜に7万本ものアカマツやクロマツが生い茂る観光名所として有名である。しかし、その松の木が津波でみんな流されて、たった1本だけが生き残ったそうだ。それを地元では、「奇跡の一本松」と呼ばれ、みんなに希望を与えているそうだ。ここで私は考えた。「奇跡」とは何だろうか。私が「奇跡」と考えてすぐに思いつくのは、よくテ

レベで放送されているプロゴルファーが起こしている、ホールインワンやイーグルといったものだ。解説者が言うには、その確率は何十年に1回や何億打に1回だそうだ。そんな話を聞くとすごい「奇跡」だと思う。他にも映画やドラマを見ていると多々そのようなことを感じる。この時、私と陸前高田市の人々が目の当たりにした「奇跡」は同じだろうか。私は、実際にこの2つの「奇跡」を体験したわけではないが、おそらく違うであろう。陸前高田市の人々がプロゴルファーのホールインワンを見て、生きる希望を持てるだろうか。逆に私がテレビに映された1本の松を見て、陸前高田市の人々のような希望を見い出すことができるだろうか。自然界が起こす「奇跡」は、真暗闇、どん底の状態の時、生命に再び灯火を与えてくれる力があるのだと思う。人間界が起こす「奇跡」には、さらに人間自身を向上させるチャンスを与える力があるのではないかと考える。人間はテクノロジーの進歩により森林伐採など様々な形で環境破壊をしている。それにもかかわらず自然は希望を与えてくれた。これを機にもう一度環境問題について考え、自然とうまく共存していくべきだと思う。

次に「アンパンマン」がどのような思いで創られたのかだ。ウルトラマンや仮面ライダーといったヒーローものが流行した。しかし、それらのヒーローは悪いやつをやっつけるのが仕事である。いろんな兵器が出てきて森や町を破壊して戦う。これを見ると、戦争はカッコイイものになってしまうかもしれない。そうならないために新しいスーパーマンを描きたくて「アンパンマン」を創ったそうだ。たしかに「アンパンマン」には、ウルトラマンや仮面ライダーのような兵器は出てこない。「アンパンマン」は食品と細菌の戦いであり、パンチやキックで戦っている。そのおかげで日本は平和を維持しているのかもしれないと思った。

次に、私が「アンパンマン」の中で特に印象深い行為と感じた、自分の顔であるパンを配ることについてだ。これは、やなせさんが考える正義が深く関係していた。彼は、戦争を通してある日を境に、正義がいとも簡単に逆転してしまうことを痛切に知った。そこで引っくり返らない正義を考えたとときに、見つけた答えが「ひもじい人を助ける」ことだったのだ。これが自分の顔をちぎって食べさせることに

繋がったようだ。私は、まだ正義が逆転してしまったような体験をしたことがない。しかし、世界を見てみると、各国の正義が戦っているように思えてくる。そしてその勝負によって正義が変化しているのだろう。「ひもじい人を助ける」という正義を持っていれば、世界がもっと平和になると思う。自分の身を犠牲にしても困っている人に手を差しのべられるようになりたい。また、そんな人が増えれば良いと思う。

最後に「アンパンマン」のテーマソングについてである。幼少時には、ただなんとなく楽しく歌っていたのを覚えている。しかし、今になってその歌詞を見てみると、とても難しいフレーズが使っていた。幼少時にこんなのを歌っていたのかとびっくりした。なぜ難しいフレーズを使ったかという、子どもたちは、言葉がわからなくても本質を捉えているからだそうだ。はたして私は、なんのために生まれてなにをして生きるのか。聞かれても答えることができない。考えれば考えるほど分からなくなる。だから、これからの人生の中で見つけたいといけない。もし、答えが見つかったならとても幸せだと思う。これから、この質問を自分自身に問いかけ続け、一日一日を大切にしていこうと思う。



私は今まで数々の本と出会ってきた。SF、伝記、歴史小説、文学など、ジャンルも様々である。その中で、最も「この本と出会えて良かった」と思える1冊の本がある。森見登美彦著、「夜は短し歩けよ乙女」である。

主人公の「私」は、大学のサークルの後輩である、黒髪の「乙女」に一目惚れしてしまう。純粋で優しく破天荒な「乙女」と、彼女が気になって後を追いかける、少し奥手な「私」は、夜の街や古本市、学園祭などで、不思議な人物達と不思議な事件に巻き込まれていく。その風景を、「私」と「乙女」の視点から、コミカルに描いた少し幻想的な恋愛小説で

ある。

この作品の特徴は、その独特な世界観にあるだろう。幻想的でありながら何処か現実的であり、少し懐かしいような雰囲気をはらんでいる。作品の舞台が京都である点も、作品の雰囲気を助長していると思う。これは個人的な見解ではあるが、京都は日本人にとって少し神秘的なイメージを持っている場所であると考えているからだ。そういったものが読者の想像力をくすぐり、読んでいて飽きる事のない作品にしているのだろう。何度読み返しても、面白いと思える。

私がこの作品の中で一番印象に残っているシーンは、「私」と「乙女」が喫茶店で待ち合わせをしている最後のシーンである。これまでの2人の物語は、非現実と喧騒にあふれ、とても落ち着いてなどいなかった。それ故に「私」は「乙女」との距離の縮まりを実感する事が出来なかったのだ。そしてこの作品では、最後まで「私」と「乙女」がお互いに意図的に出会う事はなかった。無論、「私」の方は「乙女」の目に留まる為に、精一杯の試行錯誤を凝らして、いろんところで偶然を装って出会ってきたのだが、「乙女」の方は一向に「私の思いに気付く気配はなかった。ところが第4章の「魔風邪恋風邪」において、「乙女」は「私」に対して特別な感情を抱いているのがわかる描写がある。天真爛漫な「乙女」にとって、それが恋という感情だという事には気がついてなかったようだが、物語の最後に喫茶店で待ち合わせするときは、明確な感情描写こそないものの、「乙女」は完全に「私」を意識していると思わせる感じがある。読んでいて心がなんだかほんわかとした。

もうひとつ、考えさせられたのは、「乙女」や「私」を通して、周りの環境が変わるところである。例えば東堂鯉センターを営む東堂。彼は自分が育てていた鯉を竜巻にさらわれ、絶望の淵で自殺を図ろうとした。しかし「乙女」がそこにいた事、そして「乙女」を追っかけている「私」がそこに入ってきた事で彼の人生は立ち直るのだった。この作品の裏で手を引くのが李白という謎の大富豪。どんな作品にも、大きな力を持った悪役の人間は存在する。ただ「乙女」の奔放さには李白も負けを認めざるを得なかった。李白もまた、この「乙女」に関わって変わった人間の1人なのだろう。この作品は、全てが

「乙女」を中心になって巻き起こる。いわば台風のようなものではないだろうか。周りは渦巻いているものの、中心は穏やかな空間が広がっている。この作品では、「乙女」の周りこそ大きく渦巻き、すぐに変わっていくものの、「乙女」の生き方、考え方は大きく変わらない。しかしそこを動かしたのが「私」の存在ではないだろうか。「私」は、自分のやっている事がうまくいっているとは思っていないようだったが、確実に、少しずつ「乙女」という大きな存在を動かしているのだと思う。「私」の一途で地道な努力には、方向性こそ違うものを見習うべきところがあると思った。

この作品を読んで感じたのが、人間がどれほど非現実憧れを抱いているのかということだ。私たちが普段生きている世界では、それほど大きな刺激というものはそうそうない。毎日変わらない日々を淡々と過ごしているだけだという人もいることだろう。やはり、人は心のどこかで、普段遭遇しえない事を思い描いているのではないだろうか。帰宅途中の路地裏の先に、山の上に続く石段を上った先に、何かを想像してしまう人は少なくはないだろう。だからこそSFはずっと人気なジャンルのひとつであるのだと思う。この作品はSFというには現実に近いので、そこがまた「これならありえるのでは？」と読み手に思わせているのかもしれない。作品から漂ってくる少しレトロな雰囲気も、そういった気持ちに拍車をかけているのだと思った。

一つ一つの言い回しや文章表現がとてもユーモアたっぷり、読んでいて楽しく、時折吹き出してしまふようなところがあった。想像心を掻き立てるような演出で、読後感も素晴らしかった。私はあまりこういうジャンルは読まないのだが、この作品はそれでも好きになれるのだと思う。作品の雰囲気で気分が高揚するので、電車の中など少し退屈な時などに読むのを勧めたい。





私が図書館に入ってまず目にとまったのがこの本である。題名にぴったりの青い空色をした表紙と大きく印刷されていた「いいじゃん。あたしたちには愛がある。」が印象的だった。主人公が今の自分と同じ16歳の女の子だったので、私に共感できることや今の自分しか感じるできないことがみつけれられるのではないかと直感的に思ったのである。

主人公の理穂は、私と同じ高校生で物語の中で彼女の16歳を生きている。私の近くに「理穂」という1人の同年代の女の子が存在していると感じるくらい、彼女を感じることは今の私が日々感じることに似通っていた。現実の同年代の女の子でもひとりひとり感じることは当然違う。だから意見の違いはもちろんあった。しかし、考え方や歩いていてふと思うこと、16歳の今、私が抱くような複雑な思いがそこにはあった。自分では言い表せない思いを理穂が代弁してくれた。私はその思いを咀嚼して初めて自分で納得したのである。理穂と私の違いは、理穂はすぐに崩れてしまいそうでも自分をしっかりと持っていることくらいだろう。それぞれの狭い世界の中で今を生きる同じ高校生なのだから。16歳というのは自分自身が自分のことを理解できないような年齢だ。今生きていてとても楽しい。体の底からエネルギーがこみあげてきて「今ならなんでもできる。」という思いを抱いたり、理穂のように今が永遠に続けばいいと感じることもある。しかし、今の自分を突き破って誰も持っていない何かや、正反対の自分に出会いたいとも思う。自分自身を冷静に分析すると、大人には分からないような、自分でも理解できない思いを誰でもが抱えていることに気づくのではないだろうか。絵の具にはたくさんの色が存在する。どんな色でも反対色は存在し、混ざったら濁ったような色になってしまうこともある。今の私であればどのような色と色とを組み合わせると綺麗な色になるかがわかる。それは美術などの時間に絵の具に触れ、スケッチブックに数々の絵を描いたという経験

故にである。しかし、絵の具と出会う前の私であれば、どの色を組み合わせればいいかについて全く無知だった。ましてや組み合わせることさえも知らなかった。自分で絵の具に触れて様々な色を混ぜてみるとどんな色が生まれるかなんて分からないだろう。そうすることで絶対に合わないと思っていたような色の組み合わせができたり、思いがけないところで反対色を発見したりする。16歳の自分はまさに試行錯誤しながら色をみつめている最中だ。たくさんの色をまだみつけない私は、すぐに壁にあたってしまう。それは良い意味でもあると思うし、悪い意味でもある。良く言えば感受性が豊か。悪く言ってしまうと人に流されやすく、傷つきやすく、脆い。いつも自分を見失ってしまいそうで、どこに歩いていくべきかさえも分からない。学校生活も感情がゆらゆら揺れる日々である。少し前の私であれば、自分の感情に素直に行動し、人の目だけを気にするのではなく自分らしく生きていた。しかし、自分を見つめれば見つめるほど、今の私が本物なのか偽物なのかさえも分からなくなってしまった。いつの間にか臆病になってしまった。今の私は今の自分を恐れている。自分自身を受け入れるほど素直にはなれないのだ。そんな私に、理穂が言っていた言葉は印象的だった。「油断するな。みんなが期待するような美しい物語に嵌め込まれたら、逃げ出せない。その役から抜け出せなくなる。捕まりたくない。演じたくない。あたしは主役をはりたいたいのだ。演出も脚本も主演も、全部あたしがやる。あたしに役を与えて、演じると命じるもののかたっぱしから蹴っ飛ばしたい。他人の物語の中で生きていくことだけは、したくない。」不覚にも涙がこぼれた瞬間だった。まさにそうなのだ。今の私は、他人の物語の中で美しくあろうとしているのではないか。私だけの物語の中で美しく生きるのではなく、他人の物語の口で格好ばかりつけようとしている。だから苦しいのだ。しかし、すぐにそんな自分を変えることができるほど素直ではない。今まで目を逸らしていたことを理穂の言葉ではっきりとつきつけられた。

理穂は言った。「あたし達の前には長い長い時間がある。でも今しか感じられない歌とか、今しか愛せないものもある。過ぎていく時を惜しむことはしたくないのだ。」私には16歳の時間がまだたくさんある。17歳になればもう少し素直でまっす



くな自分がいるのだろうか。来年の今頃はどのようにしているのだろう。理穂も私もそれぞれの人生において主人公でなければならない。切ないほどに透明な16歳という今この瞬間は、間違いなく私だけのものなのである。



読書感想文を書くにあたって、20世紀を代表する作家、フランツ・カフカの『変身』という中編小説を読むことにした。この本を選んだ理由は、読書感想文を書かなければならないことを伝えた友人から薦められたことと、粗筋を読んだ限りで非常に奇抜で単純に面白そうな話だと思ったからである。中編小説というところにも惹かれた。短すぎず長すぎず、一文が示す意味を読み取ることと、そもそも長文を読むのが苦手な私には丁度良いと思った。

この物語のおおまかな粗筋を言うと、一布地の販売員をしているグレーゴル・ザムザという青年が、ある朝、自室のベッドで目を覚ますと自分が巨大な虫になっていることに気がつく。グレーゴルの両親と妹は、肉親の急な「変身」に戸惑い、彼の部屋に鍵を掛け、心配しながらも忌み嫌う素振りを見せる。収入源を失った一家は、グレーゴルの代わりに働き始めることにするのだが、そんな中、妹がヴァイオリンをひいているときに、変身した兄が部屋から出てくる。最後は妹が決断をする形で兄を切り捨てる。新天地に到着した両親には、真っ先に席を立ちあがって若々しい手足をぐっと伸ばした妹の姿が、彼らの新しい夢とよき意図の確証のように映った。－という話である。

自分の読んだ本の背表紙にも書いてあったが、グレーゴルの体験する非日常な中での日常を、事実のみを冷静に伝える形でまるでレポートのような文体で、この小説は書かれていた。洋書を日本語訳したものだったからだろうが、表現も少々難しいものが使われていて、文自体を未だ理解できていないものも多い。故に私としては非常に感情移入しづらく、

情景を思い浮かべることですら一苦勞な小説だった。読み易いだろうと思って選んだ小説ただだけに、「失敗した」とすら思ったほどである。そもそも私が理解できている部分だけで、この小説には不思議に思うところがたくさんあった。まず主人公であるグレーゴルがなぜ自分が虫になったのかを考えている描写が一切ないこと、虫になったことに対しての悲愴感が主人公から全く感じられないこと、主人公が以前は人間として存在していたというエピソードが全く描かれていないこと、・・・その他にも不思議に思うところは多々あったが、今挙げたものは特に気にかかっている。本来なら描かれるべきであるものはずだからである。今思えば、物語が読みづらかったのは、文体のせいでも表現方法のせいでもなく、この3つが描かれていなかったからではないだろうかと思っている。

一番印象に残っている場面として、グレーゴルの妹が虫になった彼を切り離す場面を挙げる。それまでは嫌がる両親に代わって、グレーゴルに食事を届けたり、家具の移動を手伝ったりと、虫になってもなお実兄を想う気持ちが見て取れて、この物語の真意の焦点をそこに合わせようとさえしたほどだったが、グレーゴルを切り離す場面では一変して、これまでのストレスを吐き出すようについに本音を言い始める。これまでの主人公の経済面での努力を忘れたかのように、自分たちの現在、そして将来の苦勞を予想し、言いたてて、虫の放逐を決定する。その理由が、「もはや兄は兄ではなくただの虫である」こと、「わたしたちのことをわかっている（まだ兄であるとする）ならば、自分から出てゆくはずである」ことの2つである。特に後者の理由は主人公にとっては一番残酷なものだったのではないだろうか。家族のこれまでの行動から虫がなお、僅かでもグレーゴルの心を持っていると考えているということが窺えるからである。父親は父親でグレーゴルにりんごを投げつけ怪我をさせ、母親は母親で、息子を気遣う面を見せながらも姿を見たら悲鳴を上げ気絶してしまうといったものだったので、唯一グレーゴルに対してまともに接してくれていると思っていたはずの妹のこの決断は、展開的には少々残念だった。

この物語の真意を考えたとき、私は「人生の無常さ」かなあと考えた。当たり前のこと、当たり前じゃなくなる時が必ず来るのである・・・みたいな、

そういうことかとも思ったが、それを友人に伝えたら友人の意見が返ってきた。「自然界では、人間の一生も、虫の生涯となんら変わらないものである。」ということではないか、と。一生を価値のあるものにするのは自分自身であり、その価値を決めるのも自分自身である。・・・確かに、グレーゴルの虫になる以前と、なった後の生活を比べてみると、グレーゴルは家族のためにただ働くだけの人間だったように思う。自分が虫になってもそのことを驚き、悩むよりは仕事の事を考え、営業に出かけようとするくらいだった。彼はいわばはたらき蟻同然の生活を送っていたのだ。確かにそう考えてみると友人の意見の方が説得力があるように思う。それを思いながらまた読み返してみるのもいいかもしれない。ただ、一応考えた自分の意見もあまり悪くはないと思っていたので、結論、この小説の真意は、「人生の無常さを伝えたくて、人間と虫の一生は自分自身でその価値を決めることができるという点では大差ないものであることを示す」ことであると考え。人の見方によって感じ方も変わるのだろうが、この小説がひどく不条理に書かれていたのは、読者個人の独自の意見を作らせやすくするためではないのだろうか。読み終わってみて、初めて気付く事がこの小説には多かったように思う。今になって、すごくおもしろいと思った。



# 第58回 青少年読書感想文全国コンクール 熊本県審査入賞者!

第58回青少年読書感想文全国コンクール熊本県審査において、校内読書感想文コンクールで入選した3名を応募し2名が入賞を果たしました。

記

優秀賞…2年3組 樋口 佳奈 「あしたの私のつくり方」を読んで  
入 選…1年1組 濱崎 健 「アルジャーノンに花束を」を読んで

# 第32回 全国高校生読書体験記コンクール 入賞者!

第32回全国高校生読書体験記コンクールにおいて、校内読書感想文コンクールで入選した5名を応募し1名が入賞を果たしました。

記

入選…2年3組 上妻 なお ガールズ・ブルー



表彰式欠席



平成25年2月14日 於：会議室

## 図書館利用案内

### ◆開館時間・休館日

平日	4月～9月 10月～3月 春季・夏季・冬季の休業期間中の平日	8：30～20：00 8：30～19：00 8：30～17：00
土曜日	4月～3月 春季・夏季・冬季の休業期間中の土曜日	10：00～16：00 休館
休館日	日曜日、祝日、12月28日～1月4日	

### ◆貸出について

貸出しの種類	借受者	貸出期間	貸出冊数
一般貸出	教職員	1カ月間	5冊以内
	学生	1週間	3冊以内
	一般利用者	1週間	3冊以内
長期貸出	学生 卒業及び特別研究生	春季、夏季、冬季休業期間中 2ヶ月	5冊以内 5冊以内
卒業研究・特別研究用	本科5年生・専攻科生		

- 図書を借りるときは、借りたい図書に学生証を添えて図書係員に申し出て下さい。
- 図書を返却するときは図書係員に返却して下さい。

### ◆注意事項

- 図書、雑誌等は無断で持ち出さないこと。
- 館内では静かにすること。
- 館内では飲食はしないこと。

## お知らせ

### ◆校内読書感想文・作文コンクール

図書館では例年、読書感想文・作文コンクールを実施しております。このコンクールには奨学後援会の協力を得て、図書券を副賞としています。

最優秀作	1点	図書券1万円分
優秀作	3点程度	図書券6千円分
佳作	10点程度	図書券4千円分

作品の募集は、5月から7月にかけて行っておりますので、多くの応募をお待ちしております。詳細については図書館に掲示します。

なお、新1・2年生につきましては、国語科からの春休みの宿題として読書感想文も対象となりますので、力作をお願いします。

### ◆卒業・修了予定の学生へ

- 貸出中の図書は早めに返却して下さい。
- 未返却の学生は、卒業・修了判定会議にその旨報告します。

## 図書館利用状況報告

### 入館者数（平成24年4月～平成25年1月）

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	合計
通常時間内	883	3,137	5,245	4,302	2,790	2,128	3,147	4,303	2,242	2,949	31,126
夜間開館	296	2,089	1,642	1,580	315	199	595	1,268	395	1,060	9,439
土曜開館	207	232	383	186	288	41	65	401	263	22	2,088
合計	1,386	5,458	7,270	6,068	3,393	2,368	3,807	5,972	2,900	4,031	42,653

## 蔵書数及び雑誌等の種類

### ◎蔵書数（平成25年1月31日現在）

区分	総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	工学	産業	芸術	語学	文学	計
和書	6,795	3,234	5,555	6,976	11,040	19,214	1,160	3,086	3,284	13,856	74,200
洋書	585	21	51	34	757	1,724	21	27	1,120	1,021	5,361
計	7,380	3,255	5,606	7,010	11,797	20,938	1,181	3,113	4,404	14,877	79,561

### ◎雑誌

和雑誌	103種
洋雑誌	8種

### ◎視聴覚資料

種別	DVD	ビデオ	CD	LD
数量	222巻	790巻	620枚	190枚

**「図書館だより」編集担当委員**

図書館長

三好正純

図書館運営委員

大石信弘

**編集後記**

校庭に梅の花が咲きほころぶこの時期は、年度の節目でもあり、1年を振り返る時期でもあります。みなさんの1年間は、きっと実り多かったものと推察しますが、いかがでしょうか。

さて、このたび本年度の熊本キャンパス図書館だより「くぬぎの森」第24号をお届けする運びとなりました。熊本キャンパス図書館がどのように利用されているかを知る手がかりとして読んで頂ければ幸いです。お忙しい中、寄稿していただいた方々にはこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。図書館長の三好先生からは、図書館改装について詳しく書いていただきました。アンケートでは4分の3以上の学生が新しい図書館に満足しているということです。不満の理由も記されており、改善の足掛かりとなることでしょう。また、人間情報システム工学科の村上先生からは、「キリシタン」をキーワードに、先生の読書探索によって時間と空間の中へと位置付けた成果が披露されています。文中、「くぬぎの森」に掲載した先生の文章が論文に引用されていることも紹介されています。そして、恒例の校内読書感想文コンクールの選考結果および入選作を掲載しています。さらに、図書館でアルバイトをしている学生から受付業務を通した随想もいただきました。学校での業務というやや離れた視点から学生生活を見直した人もいます。

新しい図書館で何を不得、何を発信するかはみなさんに任されています。どんなことにも新しい図書館は対応できると自負しています。好きなことをとことん突き詰め、独創的な文化をこの図書館から発信していただけたら幸いです。

図書館運営委員 大石 信弘